

5 月



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
5月号
No. 599

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





オクロレウカ 百合

△表紙の花△ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 オクロレウカ (菫浦科)
子株 小型の百合 (百合科)

オクロレウカとピンクの百合で株分け生花をいけてみた。小型の百合にはスカシユリとヒメユリをかけあわせてつくられた「プチソレイユ」というのがあるが、プチソレイユはオレンジ色で、おそらくその系統の薄紅色の品種だろう。オクロレウカの青紫色との色映りがいい。

オクロレウカの原産地はトルコ周辺だそうで、丈夫で美しい葉のほうが早くに花材となっていたが、近年花も時季には出まわっている。写真では惜しくも花が開いてないが、花菖蒲の花をシャープにしたような姿で花弁はあまり垂れない。



花蘇芳

△2頁の花△

櫻子

花蘇芳の樹皮は昔から染料として使われていたが、物を染めると美しい紫紅色となる蘇芳染めに似るところからこの名前になったらしい。



春の花木だが、枝の姿は単調だ。葉に先立ち小さな蝶形の花が沢山かたまつて咲く。ピンク色が多くて白は珍しいと思う。庭木として見る人が多いが、野生は高木になるという。大きめにいけた方が密集して咲く花の様子が良くわかる。今年の春は桜が散ってから寒い日が続いたので、花蘇芳も花が長く咲いていた。

鉄線も芍薬（ポーラフエイ）も毎年出荷の時期が少しずつ早くなっている様な気がする。偶然の出会いの取り合わせ。

花材 花蘇芳（豆科）

芍薬（牡丹科）

鉄線（金縷花科）

花器 透かし陶鉢

花菖蒲と鵝芍薬 ときしやくやく

△3頁の花▽ 櫻子

花菖蒲に芍薬はとてもよく映る。作例のように二種で盛花にしてもいいし、株分け生花にするのも調和が美しい。

作例の芍薬はトキシヤクヤクと呼ばれる。まだあまり多く出まわっていないようだ。咲くと白に淡いピンク色がさして、鵝が羽を広げた時のような色合いなのでこの名前がつけられたのだろう。葉も小さくて上品である。今後増えてほしいなと思う。

花材 花菖蒲（菖蒲科）

オクロレウカの葉（菖蒲科）

鵝芍薬（牡丹科）

花器 交趾焼鉢



ミニガーデン

主材 ツルバキア（ツルバキア科）

副材 ツルバキア（百合科）

ペラルゴニウム（風露草科）

手鞠草（撫子科）

作例の白いニラの花のようなのがツルバキア（淡い草色が一般的）。ピンクの花がペラルゴニウムでセラニウムの仲間だ。この小さな二種類の花はいずれも南アフリカ原産。どちらもはじめていけたがなんとも可愛らしい花である。

この小さな花たちを主役にする工夫として手鞠草を苔のように集めてその間から出してみた。金属パイプの口には銅のおとしがはめてあり、中に吸水性スポンジを入れて花止めしている。

手鞠草は髭撫子の園芸品種で、髭撫子の玉状に咲く性質を残しながら花弁のない萼だけが鞠状に集まった姿をしている。この手鞠草を同じ高さに数本寄せると苔がのっているように見えて面白い。この手法で湯飲みに付けて食卓に飾ってもよさそう。作例では器の強さにあわせて楓の小枝を横へ出している。細幅の民芸敷物に飾れば部屋の中にミニガーデンのできあがり。



③ 楓の小枝を枝振りにあわせて横へ出す。楓の足元は水揚げのために皮を削っておく。



① 銅のおとしのついたステンレスの筒に吸水性スポンジを入れて手鞠草を短くさす。吸水性スポンジはナイフで切って事前に水を吸わせておく。



④ ペラルゴニウムは鉢から小枝を切って使っている。二本前へ挿したところ。バランスを考えながらツルバキアを挿してゆく。(4頁の花)



② 合計五本の手鞠草で苔の山のようなふくらみをつくる。





金雀児

えにしだ
＼8頁の花＼

仙溪

花型 草型 留流し

花器 天女模様青銅花器

白花の金雀児を十五本使っているが、水際を細く寄せるために脇枝を掃除するのに手間がかかるのと、分かれ枝を櫛で解いたようにさばくのには根気が必要となる。

金雀児は生花以外ではあまりいけませんが日本の植物ではなく地中海沿岸原産。豆科の常緑低木で、明治期に導入され庭木や公園に植えられた。開花期は春。花色は黄色が主である。

この原稿を書いている今は「デキスト」撮影から二週間経つが、白い花がちらほらと咲きだした。水を替えているのでまだまだ綺麗に飾っておけそうだ。いける手間はかかるけれど、その分長く楽しめる。



京展出品作

木瓜 〆9頁の花〆

仙溪

花型 草型



花器 緑釉耳付陶コンポート

今年の華道京展には木瓜の生花を出品した。太い枝にびっしりと花が咲いて、前期と後期の六日間、目を楽しませてくれた。花展のあと大切に持ち帰って撮影したが、運ぶ間にも花が散ってしまっただけで、まだまだしっかり花が残っている。会期中は花で枝が見えないくらいだった。この木瓜はおそらく私よりも先輩だろう。せめてちゃんと写真に撮らないと罰が当たる。感謝をこめて写真に撮った。



若葉色

仙溪

徳島生花研究会の折に武田慶園先生から柁木の若枝をいただいたのでいけてみた。まだ少し柔らかい葉は明るい黄緑色で、陽にあたると黄色くなるようだ。若枝の下には元からの葉がついていたが、若葉色を目立たせるため取り去っている。

柁木は日本から中国に分布する錦木科の常緑低木で、よく垣根として植えられている。いけばなでは古典花の生花の花材として使われる以外には使うことがあまりないが、若葉なら洋花と合わせても綺麗なのではないかと思う。

武田先生はこの柁木の若葉にグロリオサをとり合わせたことがあるそうだが、きつといい感じになると思う。

作例にはカーネーション二色（ピンクの濃淡）と紫色のリューココリーネをとり合わせた。やや甘い感じになったが、初夏の爽やかさが感じられる。意外と相手を選ぶ若葉色だが水揚げもいいのでこれからもまたいけてみたい。

花材

カーネーション（撫子科）

リューココリーネ（百合科）

柁木の若葉（錦木科）

花器

空色釉陶水差し



ボーンチャイナ 桜子

写真の器はイギリスのコープランド社製と聞いている。白地に金とトルコブルーで装飾されて、台座の三方には田園風景が細かく描かれている。ボーンチャイナのコンポートである。

ヨーロッパに中国の陶磁器が伝わったのは十三世紀頃。それ以降、東洋の陶磁器は盛んに研究されて、ヨーロッパで最初に磁器の製造に成功したのは十八世紀ドイツのマイセン地方だった（一七〇九年）。日本の有田焼（柿右衛門様式）も大きな影響を与えている。

ところが当時イギリスでは白磁器の主成分であるカオリンが手に入らず独自の製法を工夫し、一七四八年、ボウ窯のトーマス・フライがイギリスで採れる原料の中に牛の骨灰「ボーンアッシュ」を加えることによって良質の磁器を作ることに成功した。これが白磁器とは違う温かみのあるボーンチャイナの誕生だ。

ヨーロッパの人と話す時にはこの違いを知っておいたほうがいいだろう。白い洋食器はみんなボーンチャイナだと思っていては馬鹿にされてしまう。骨灰を用いてつくられた磁器をボーンチャイナと呼ぶと覚えておこう。

花材 ベラドンナ二種（金鳳花科）

スプレー薔薇（薔薇科）

「フエアビアンカ」

花器 ボーンチャイナ・コンポート



パンダナス

仙溪

昨年四月の日本いけばな芸術展への出品が父の最後のいけばな展出品となったが（写真左）、花材はラタニアという椰子の実と深紅のアマリリス、そしてこのパンダナスであった。上の写真は花展後の師範認証式のためにいけ直したもので、ラタニアの代わりに白のアマリリスをいけている。

パンダナスの葉先は鋭く尖っているので触るととても痛い。花展ではこのやっかいなパンダナスに加えて、特大の別のパンダナスも父は入れている。痛がるうが自分の思いを伝えるためならことん手間をかけるのが父のいけばなであった。

花材 パンダナス（蝟の木科）

アマリリス二色（彼岸花科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 カットガラス・コンポート



二〇一二年四月

日本いけばな芸術展（大阪）

桑原仙齋 出品作

ラタニア パンダナス二種

アマリリス ミリオクラダス

鴝色

仙溪

日本で野生の鴝が姿を消してから十年が経つ。以前は日本各地に飛来していたので、「鴝色」という色名が鴝が羽を広げたときに見える風切羽の薄紅色からきているのを知る人も多かっただろうが、恥ずかしながら私は鴝色がいったいどんな色かも知らなかった。

先日の名古屋での稽古の時にSさんが庭に咲いた牡丹の色が鴝色なのだと言ってくださり、別の人は若い女性の小袖に鴝色が多いという話をされていて、なんとなく可愛い明るいピンク色を想像することができた。

調べてみると江戸時代の染色指南書「手鑑模様節用」に「とき羽色一名志のめいろ」とあって、東雲色と同色であるとされている。また二葉亭四迷の「浮雲」には、十八才のお勢が黄八丈の小袖に藍鼠の帯、帯上に時色縮緬という姿で菊見に出かける様子が書かれている。「時色（鴝色）」や「藍鼠」という色がどんな色なのか、「黄八丈」がどんな織物なのか知っている人はどれくらいいるのだろう。日本の伝統文化から色名が消えてしまつては楽しみが半減してしまう。色名の原点は染色にあり、着物文化で次の世代に引き継いでいかねば消えてしまう。

日本から野生の鴝は消えてしまつたけれど、色名としては残っている。ほしい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2014 年
5 月号
No.611

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



大輪のクレマチス

△表紙の花▽ 櫻子

クレマチスと呼ぶと洋花。鉄線と呼ぶと和花。呼び方で洋と和にイメージが変わるけれど、やはり私は鉄線と呼んでしまう。

日本や中国では大輪の鉄線を鉢に仕立てて鑑賞する事が多いが、ヨーロッパ産のクレマチスやその交配種は家の壁に這わせたりアーチに絡めたりと随分景色も変わる。どちらもそれぞれに鉄線の優しい姿が表れて美しいと思う。

この花も満天星の枝に絡ませて広げたり下げたりして鉄線の自由にさせていけてみた。

花材 満天星（燈台躑躅・躑躅科）
鉄線（金鳳花科）
花器 長首陶花瓶

オクロレウカ

エピソードラム

△2頁の花▽ 仙溪

爽やかな色彩を感じる盛花。水際の繁みがない分、水面を広く見せられて気持ちがいい。ただし、剣山は小石で隠すこと。

花器の色や形にもよるが、器の口元まで水をいっぱいに入れると、それだけで清らかな谷川の空気を感じることがある。焼き物の元は土だから





らかもしれない。花器に水を満たした瞬間から、自然との接点がすでに生まれている。

オクレウカの花は茎の先端と途中にも咲く。二度目の花も咲くので長い間楽しめる。頻繁にポンプで水換えをしよう。

花材 オクレウカ（菖蒲科）

エビデンドラム（蘭科）

花器 灰色釉陶水盤

ポインセチアの仲間

△3頁の花▽ 桜子

枝だけのような植物はミルクブッシュと言ってトウダイグサ科・ユーフォルビア属で、ポインセチアの仲間であり多肉質の枝を持つ。

茎に傷をつけるとそこから白いミルクのような樹液を出すのもポインセチアと同じだ。緑色の茎が多いが、今回のものは優しいピンク色をしていた。

同じような形で立ち上がっているのはアンズリウムの蕾。二種ともユニークな姿で先が尖っている。

海中深くピンク珊瑚の間を魚が自由に泳ぐような景色を思い浮かべて。

花材 ミルクブッシュ（燈台草科）

アンズリウム（里芋科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 御影石花器



生花

ユーカリ 薔薇

仙溪

花型 二種挿し 草型 副流し
花器 陶コンポート

現代的な花材での生花の作例。

ユーカリはオーストラリア原産のフトモモ科ユーカリ属の常緑樹。500〜600種類があり、多くが高木になる。

現在世界で最も高い樹木は北アメリカ・カリフォルニアのセコイアで、樹高115m余り。とてつもなく背が高いが、過去にはなんとユーカリが世界一高い木だったそうだ。オーストラリア・ビクトリア州のユーカリの仲間、マウンテンアッシュの132m余り。この木は元々152mあったという非公式の記録もある。まさに天を突く高さだ。ちなみに京都タワーでも131mである。ユーカリをいけながら空高くそびえる木を想像するのも楽しい。根締めには小輪の薔薇を選んだ。



立華時勢粧を読む ①

今月号より、「立華時勢粧」(貞享

5年、1688年)について、そこに書かれていることを紹介してゆく。ただし江戸時代前期の木版刷りで、字体は草書体である。間違った読み方や解釈をした時はご指摘をいただきたい。また理解しやすくするために旧字は常用漢字に置き換えることにする。

「立華時勢粧」は富春軒仙溪による8冊からなる花伝書で、その内容は次のようになっている。

卷一 「立花時勢粧 上」

立花時勢粧序

真行草の図 (33図)

真の花形 (二図)

行の花形 (二図)

草の花形 (二図)

直心立の内真の花形 (二図)

直心立の内行の花形 (二図)

直心立の内草の花形 (二図)

除心真行草の事

除心立の内真の花形 (二図)

同 請上り立 (二図)

同 水際除 請上り立 (二図)

同 流枝持立 (二図)

同 内副立 (二図)

同 請流枝立 (二図)

同 中流枝立 (二図)

同 左流枝 (二図)

除真の内草の花形 (十一図)

砂物真行草の事

砂の物の内真の花形 (二図)

同行の花形 (二図)

同 草の花形 (二図)

卷二 「立花時勢粧 中」

雑体の図 (45図)

卷三 「立花時勢粧 下」

秘曲の図 (40図)

真の対の花 (二図)

行の対の花 (二図)

草の対の花 (二図)

合真 (二図)

二つ真 (二図)

おもと前置 (二図)

小しだ前置 (二図)

松の前置 (二図)

竹の胴 (二図)

南天の胴 (二図)

藤の心 (二図)

見越竹 (二図)

牡丹の心 (二図)

草花 (二図)

松竹梅 (二図)

杜若一色 (三図)

荷葉 (蓮) 一色 (三図)

菊の一色 (三図)

水仙一色 (三図)

松の一色 (三図)

紅葉一色 (三図)

櫻の一色 (三図)

草花砂の物草 (二図)

常磐木の部

木 枝 気條 株 葉

花 蔓 松 檜 柏 枇杷

栢樹 榊 榊 かなめ

しらかし かすおしみ 黄楊

棕櫚 杉 うすの木 夏はぜ

ふしくろ 栗の若ばえ

檜の葉 まゆみ 猿すべり

柞 晒木 苔木 柳 河楊

紅葉

卷五 「立花秘伝抄 二」

花の部

櫻 梅 桃 海棠 梨の花

辛夷木 杏の花 百日紅

蘇枋花 木蓮花 椿 山茶花

石楠花 長春 躑躅

蓮花 つつじ 餅つつじ

五月つつじ かうぼけ 馬酔木

紫陽花 くちなし 桐の花

実の部

澤水木 水木 梅もどき

七かまど たらよう

仙夢 みむらさき つる水木

深山樺 たちばな 燈籠草

えびつばら 南天 おもと

通用物の部

竹 笹 牡丹 藤 南天

小しだ 萩 山吹 庭櫻

粉団花 小でまり 米柳

小米花 黄梅 連翹 種紫

つる水木 えびつばら

仙夢 きじの尾 下野 しのぶ

矢筈 磐梨 がんそく 白丁花

岩檜葉 ひとつ葉 薔薇

卷六 「立花秘伝抄 三」

草の部

金盞花 露花 著我 高麗菊

鴨脚花 あやめ 芥子花

うつぼ草 春菊 銀寶珠

杜若 きすげ 姫萱草 石竹

薊 花菖蒲 芍薬 早百合草

姫百合草 洗百合草

あたこ百合草 為朝百合草

鹿子百合草 草 蒲 つくも

蓮 河骨 紫苑 萱草 葵

桔梗 女郎花 雁絳

松本仙翁花 仙翁花 檜扇

薄 唐奈 鶏頭花 旋覆花

黄精 蒲公英 紅花

だんどく花 菊 寒菊

われもこ 粟 駒つなぎ

澤ききよう 犬子草 浜木綿

蘭 藤ばかり 鼠尾草 龍膽

よろいとおし 唐車前 あわ雪

花つる 七重草 葱草

きんき草 矢筈 秋海棠

いさざ 野かいどう けまん

茜草 莎草 櫻草 虎尾

つち草 金寶花 にし木

うつぼ草 仙茨菰 ばれん

佛生花 岩芭蕉 水仙花

卷七 「立花秘伝抄 四」

七つ枝の事 (図)

(立花道具の図)

対の花真行草の事

松竹梅三瓶の事

立花陰陽の事

十三ヶ條法度の事 (図)

古代十ヶ條法度の事

立花八戒

立花十徳

立花十体

祝言に嫌うべき事

立花細工の事 (図)

草木水あくる事

花瓶の事 (図)

込の事 (図)

床前の事

下指の事

立花見様の事

立花習いようの事

卷八 「立花秘伝抄 五」

九品の花形立様の事

極真立

除心真の花形立様の事

除心行の花形立様の事

除心草の花形立様の事

草の花形立様の事

砂の物真行草

地取の事 (図)

立花名目 訓解

心の事

正心の事

副の事

請の事

見越の事

流枝の事

前置の事

胴作りの事

控枝の事

立花腰の事

水きわの事

かこいの事

谷洞の事

つや あしらいの事

意気の事 うつりの事

張弛の事

立花色の事

貫枝の事

以上のような内容になっている。



桑原専慶流

桑原 仙溪

花材

啓翁桜、菊、松、椿



手に入りやすい啓翁桜
で、小ぶりの立花を
撮影 宇佐美宏

自然美、躍動感、風情を大切に

流祖・桑原富春軒仙溪は江戸前期の立花の名手で、1688年に『立花時勢粧』8巻を出版しました。自然の草木や栽培植物の生姿を観察し、その美しさを躍動感、風情を大切にすると説いています。

118の立花図がありますが、「櫻之一色」はいつも魅了されます。自然にも思っています。

然の枝ぶりを生かした流麗な姿、技量が問われる万年青のみを水際で見せ、桜の風格を際立たせています。

いつか自分もこんな立花を立ててみたいと思う半面、これほど見事な桜を切る以上、立花の奥義を極めるまでは立ててはいけないとも思っています。



流祖、桑原富春軒仙溪の「立花時勢粧」(1688年)から「櫻之一色」





出合い花（8）

ヘリコニア 谷渡り

△9頁の花▽ 仙溪

変わった葉に出合った。

谷渡りの葉のふちがギザギザになっ
ている。いや、葉のふちから細



長い触手のようなものが無数にのびている。近くを虫が飛んだら、捕まえようと動き出しそうである。なぜこんな形になったのだろう。花屋ではタニワタリ・ドラゴンと呼んでいた。

まずタニワタリ・ドラゴンの形を見せたくて、細い口の器に立てたが、相手に選んだヘリコニアをどう入れるかかなり悩んだ。前に入れると葉が隠れてしまう。後ろに立てると葉とくっついてしまう。横に出すと平凡になる。そこで茎を繞めて葉の中間から真横に出るように入れてみて落ち着いた。

花材 タニワタリ・ドラゴン

(チャセンシダ科)

ヘリコニア (芭蕉科)

花器 白釉細口花器(清水卯一作)

カラーと薔薇

△10頁の花▽ 櫻子

花材 カラー (里芋科)

薔薇 (薔薇科)

ニユーサイラン (竜舌蘭科)

花器 ガラス水盤

カンガルーポーと海葡萄

△11頁の花▽ 櫻子

花材 カンガルーポー

(ハエモドルム科)

シーグレイプ (蓼科)

カーネーション (撫子科)

花器 白釉陶花器



和服

和服はなかなか着慣れないがよいものである。

和服は基本的に右前に着る。右前という言い方は、右の衽（えだ）を前に（先に）体につけるのでそう言うそうだ。衽が何か分からない人は調べてください（私も調べました）。

『続日本紀』によると、719年に全ての人は右前に着る命令が出されたとのこと。中国ではすでに、敵対する蛮族が左前に着ることに對抗して右前に着るようになっていたためだ。蛮族とは北方の遊牧騎馬民族のことで、彼らが弓を射るのには左前のほうが都合が良かったのだ。

ちなみに洋服は男性と女性で合わせ方が反対なのは何故でしょう。その昔、ヨーロッパの上流階級にボタンのついた衣服が定着しはじめた時に、男性は自分で着るので右側にボタンがつけられ、女性は召使いに着せてもらうためその逆につけられたそうだ。それにしても今もそのままなのは何故なのかは知らないが、ボタンを左手で器用にはめる女性の方が、右脳が発達しているかもしれない、などと想像するのも面白い。左脳は文字や言葉などを認識し、右脳は視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚などの五感を認識するそうだ。

話は脱線したが、和服文化がなくなるのは寂しいことだ。まずはハレの日だけでもできるだけ和服を着るようにしたいものである。和服を自

分で着られる人は脳も発達するのでは？。



シューベルティ 仙溪

アリウム・シューベルティをいけた記憶は数えるほどで、昔からの花材なのだが、特別な花材という印象がある。同じ百合科・葱属（アリウム属）のアリウム・ギガンチウムは背が高く、いけばなでも様々ないけ方ができるのに対して、アリウム・シューベルティの茎は20〜40cmくらいなので、低い位置にしかいけられない。

ゴムの木の葉の前にアリウム・シューベルティを重ねると、淡い赤紫色の花火のような花が際立つ。色の濃淡。面と線の広がり。静と動の対比が花の個性を引き出してくれる。華やぎを増すためにゴムの木の葉の間から赤色のアマリリスを立てた。

花材 アマリリス（彼岸花科）

アリウム・シューベルティ

（百合科）

インドゴムの木（桑科）

花器 ガラス花器



アリウム・シューベルティ

いけばな

桑原専慶流

テキスト

2015 年

5 月号

No.623

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





緑から白へ

△表紙の花▽ 桜子

紫陽花にも近い植物で、日本の山野にみられるガマズミや大手毬の仲間であるビバーナム・スノーボール。ビバーナムには他にも種類があるが、葉の先が3つに裂けているのがスノーボール。

咲きかけのつぼみの頃は若草色の花の固まりだが、真っ白へと変わっていく。柔らかくてフワフワの花で、姿も優しいので出逢えるこの季節が待ち遠しい。

水揚げは良くないので、ライラックなどと同じように足元を削ってよく割り、水切りしてたっぷりの水につける事。花が下向きだが、ちゃんと元気に咲いている。最後は本当に雪の玉のようになって、はらはらと花びらを散らす。紫陽花よりも繊細で頼りないけれどやっぱり好き。オランダ製のガラス器にバンダと取り合わせた。

花材 ビバーナム (忍冬科)

バンダ (蘭科)

花器 淡紅紫色ガラス花瓶

ライラック

△2頁の花▽ 桜子

四月末に岡山の桑原専慶流展に行く时必须ってよいほどライラックをいけておられる。庭に咲いたライラックを切ってこられるので、大



きく伸びやかで良い香り。いつも羨ましく拝見している。

ヨーロッパ原産で、フランスでもよく庭に植えられている。フランス語ではリラ。シャンソンにも「白いリラの咲く頃」があり、宝塚歌劇の『葦の花咲く頃』はこの曲が元になっているそうだ。

ドイツやフランスでお世話になった方の庭にはライラックとともに薔薇や蔓薔薇も必ず植えられていた。ともに芳しい初夏の花だ。

花材 ライラック（木犀科）

薔薇2種（薔薇科）

花器 青色ワラス花器

アルストロメリア4色

△3頁の花▽ 仙溪

はじめてアルストロメリアを見たときの印象は「鬼のパンツ」だった。花弁の縞々模様は虎を連想させる。

昆虫はこの模様を目印にして蜜を吸いに来る。このような模様を蜜標と云うそうだ。ここに蜜がありますよというサインの役目だが、言い換えれば蜜屋の看板。客の昆虫に蜜を提供し、かわりに花粉を運んでもらう約束ができています。

作例は、アルストロメリアをカラーの足元に低く集めて、水辺のサツキのような感じに付けてみた。

花材 カラー（里芋科）

オクローウカ葉（菖蒲科）

アルストロメリア（百合科）

花器 紺色釉陶鉢（フランス製）



初夏籠花

櫻子

宝鐸草を庭から切ってきた。鳴子百合に似た花の付き方で、百合科・稚児百合属の多年草。水揚げもいい。花屋で初夏の草木を買い足して籠にいった。白い小さな花は姫室木。花が2本立つのは二人静。淡紫色は都忘れ。野に咲く姿を想像しながらいけるのは楽しい。繊細な籠花生けには優しい風情の花が似合う。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む ⑫

立花秘傳抄 五

除心行の花形立様の事 (つづき)

先に紹介した七つの除真(除心)行の花形図(テキスト613号、622号)は「立花時勢粧 上」から引用している。「立花秘傳抄 五」の文章にあわせて絵図を紹介してきたが、「立花時勢粧 上」にはさらに五点の除真行の花形図があるのでここに掲載しておく。

除真行の花形には特徴のある花形がいくつかあるので、原文の順番に、絵図と照らし合わせながら解説してみよう。

左流枝ひだりながし

真こずえの梢が請の方へゆきすぎた場合、副の方が軽くなるため、左の方(真・副の方)へ流枝をつけかえて、真と張り合いをもたせる。

また、真に草などの軽いものを立てて、請に重いものを立てる時も、左に流枝を出して請と張り合わせる。

前号の第十八図では松の真が中心よりも右へ伸びていて、さらに見越、請ともに右へ大きく出ているため、流枝は松を



左流枝立

第十九図

立花 薄除真

除心の内行の花形 左流枝立 林昌

薄菊 松 梅擬 熊笹 柘植 小菊

夏はぜ 小柏 著我



流枝持立

第十一図

立花 梅除真

除心の内行の花形 流枝持立 桑原次郎兵衛

梅 枇杷 松 柳 柘植 千両 椿

水仙 嫩 狗子柳

左に低く長く出すことでバランスをとっている。

今号の第十九図は逆勝手で、右に立ち上がった薄の真に対して、請には重みのある松を立てている。請の松は枝先が中心近くへもどって真の軽さに配慮しているが、さらに流枝の松を真側（逆勝手なので右方）へ長く出して左右のバランスをとっている。

文章には左流枝にした場合の控枝の扱いについて書かれていない。流枝と交換で請の下に出すのが一般的な考え方だが、

もともと控枝は七つ道具（七つの役枝）からは外れており、控枝の無い花形もあつてよいとも書かれている（後に紹介する立花名目の解説より）ことからしても、臨機応変に考えればいいだろう。

流枝持立

真の梢を花瓶の真上にのせない（中心へもどさない）ために、副の方が重くなって請に軽いものを立てた場合、流枝に

重いものを長く出して真と張り合いを持たせる。
前号の第十図では松の真に対して松と吾木の流枝、今号の第十一図では梅の真に対して流枝には梅を伸ばし、さらに柘植と松を添わせている。

中流枝立

中流枝立とは、請の出口が高い時に、流枝を中程から出す花形で、真の除、副の出所、控枝のふりによっても中程から



第十七図

中流枝立

立花 松除真
除心の内行の花形 中流枝立 寺田八郎兵衛
松 晒 百合 枇杷 柘植 紫陽花
要 小菊 檜扇

第十五図

請流枝立

立花 柳除真
除心の内行の花形 請流枝立 谷久兵衛
柳 梅 松 千両 柘植 嫩 枇杷
水仙 狗子柳

流枝を出す。

前号第十六図ではおそろく色彩的な考慮がなされて、かん草の真と見越に対して、請の桔梗を高いところから出している。請の下が大きく空くので、流枝の松を胴の中程から出して枝先を下けている。

今号第十七図では、真の形と、水際からうけるように出た控枝にあわせて、控枝の出口よりも高く、請のすぐ下から流枝を出している。

請流枝立

真が枝垂れるものだったり、真の枝が請の上へ下がっている。請を高く出せない時、請を低くさして、その下枝を長く出すことで流枝も兼ねさせる。これを請流枝立と云う。

前号第十四図では、のき今号第十五図では松がそれぞれ請と流枝を兼ねている。そしてその下に晒木や水仙の葉を水際からあしらひとして加えている点にも注目したい。

内副立

本来の副の位置に副を出すのが困難な時、真の内側に副をつける。

前号第十二図では真の松が一度外側へ下がってから立ち上っているため、副は真の内側に梅擬を出している。

今号第十三図では真の松の分かれ枝が前へ枝垂れているので、それを生かすために副は内側に出されている。この内副は大きく中心を越えて請の外側へなびかせた特徴ある形で面白い。

水際除

真が水際近くから除く。(文中に特に説明はない。)

請上り立

真が低い位置から除く時、請には枝垂れるものを正心の元から出す。

613号に掲載した八図も請上り立である。真の出所は高いが、梢が請の方へ張り出しているので、請に枝垂れるものを立てている。逆に副は上へはねあげてある。

請正心立

水際除の真で、請上りとして竹を立てた場合には、中心に立てた竹を正心と見なし、請正心立と呼ぶ。

前号の九図がこれにあたる。竹の前に正心あしらひとして水仙が入っている。大きく垂れた笹の内側に流枝がうまくおさまり、副の梅が立ち上り、控枝は省略されている。本来の請の位置に梅のあしらひがのぞく。



内副立

第十三図

立花 松除真

除心の内行の花形 内副立 中野宗左衛門

松 苔 梅擬 菊 伊吹 柘植 小菊

檜扇 榎木 狗子柳

※絵図の番号は原本の掲載順による。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第二巻』(大日本華道界刊 思文閣出版刊)



松真立花
 花形 除真行・左流枝
 花材 松・真・副・流枝・胴
 露陽 請・前置
 菊 正真
 晒木 見越・控枝
 鳴子百合 あしらひ



第 66 回 華道京展 「粋^{すい} いけばな美のかたち」 4月16日(木)～21日(火) 大丸ミュージアム〈京都〉





カエデの見分け方

9頁の楓^{かえで}は、日頃イタヤカエデと呼んでいるが、正確にはハウチワカエデだと思う。
そこでカエデの識別方法として、葉の形とその名前を参考に紹介する。

1	イロハモミジ	11	タイワントウカエデ	21	オダウバシ
2	ヤマモミジ	12	ウリハダカエデ	22	ミヅギカエデ
3	オオモミジ	13	ホソエカエデ	23	メダスリノキ
4	ハウチワカエデ	14	ヤクシマオウダカエデ	24	チドリノキ
5	コハウチワカエデ	15	ワリカエデ	25	ヒトツバカエデ
6	オオイタヤメイギツ	16	ミネカエデ	26	アサノハカエデ
7	ヒサウチワカエデ	17	オシロイタマカエデ	27	カウコギカエデ
8	イタヤカエデ	18	コミネカエデ	28	クスノハカエデ
9	エンコウカエデ	19	カギカエデ	29	ハナノキ
10	トウカエデ	20	テツカエデ	30	タニシイタヤ



はじめ
林田 甫 様のホームページ「カエデともみじ」より転載
<http://mohsho.image.coocan.jp/report7.html>



華道京展

仙溪

笠松真の立花（前期）

真の枝は直立した笠松の下に左右に枝がでていたので、それらを生かして大きな真とし、下半分に残りの役枝を配した。松と石楠花だけで立てた立花。花器は銅立花瓶。



七竈の生花（後期）

大きな蛇の目に大きな又木を使用。自然の曲がりを生かした真に他の枝を添わせている。花器は阪野鳳洋作の陶深鉢で岩のような口辺のつくりは自然美を感じる。



出逢い花（19）

仙溪

雪餅草

美女撫子

雪「おいらの頭とあんたの頭と、色がよく似てますねえ」

美「あたしの方がいい色だわ。でもあなたの白い縦縞はいかしてる」

雪「いやー嬉しいなあ、自分でも気

に入ってんだじつは。おいらの仲間はみんなよく似てるもんだから、ちよつと個性的にしようかなとね」

美「首のあたりはピンストライプね、オシャレだわ」

今月の出逢い花は雪餅草の相手を探そうちに、この珍しい撫子に出逢った。土っぽいや器に立てると、二

人（二本）で岩風呂につかっているようで、勝手に会話を想像してみた。

雪餅草は三重、奈良、四国に分布する里芋科・天南星属の多年草で、肉穂花序の先が白く膨らんで、餅をのせているように見える。切り花にしても水揚げがいい。

この撫子の品種名はブレアンサ

ス・クイーン。美女撫子（別名、髭撫子）の園芸品種である。美女撫子はヨーロッパ原産だが、アメリカ経由で日本にきたためアメリカ撫子とも呼ぶそう。なんともややこしい。最近よく見かける緑の苔玉のような手毬草も美女撫子の改良品種。

見知らぬ男女の混浴のようにも見えてくる。格好つけつつ緊張する雪

餅草と、のんびり寛ぐ美女撫子。花たちの会話を想像するのも楽しい。

花材 雪餅草（里芋科）

美女撫子「ブレアンサス・クイーン」（撫子科）

花器 焼締花瓶

レモンだより

レモンちゃんは花をいけていると、じつと横で見たりする。なにか大切なものらしいことが分かるのか、いけた花を倒すことは今のところない。

家の出入りは自由だが敷地から外へは出ない（おそろく）。まれに路地の先までついてくる時も、外へは決して出ないし、大概は写真の位置でストップ。忘れものを取りに帰るとまだじつと見ていたりする。外出から帰った時に足音に気付いて出迎えにきてくれたりすると、もう、あれですな、嬉しいもんです。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2016 年
5 月号
No.635

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





カーネーション

△表紙の花▽ 桜子

花材 カーネーション3色

(撫子科)

シゲレープ (蓼科)

五月で十五世家元襲名から十二年になる。その同じ年の八月に母が亡くなった。今も多くの人の思い出の中に母はいてくれる。お弟子さん達のいけばなの中にも母の教えは生きている。

「大切なことは何度何度とも言っ
てあげたらいい」繰り返し繰り返し、
丁寧に指導していたが、私も同じこ
とをしているようだ。そんなことを
思いながら、優しい色合いでカー
ネーションをいけた。

横から見た奥行き



藤 牡丹

△2頁の花▽

桜子

花材 藤 (豆科)

牡丹 (牡丹科)

花器 掛分釉大壺 (清水保孝作)

藤の切り枝、牡丹の鉢。花屋で出
逢った特別な花を、直感をたよりに



大きな壺にさらっといけた。藤も牡丹もめったにいけない。どちらも水揚げが難しい。経験と判断力が要る花だが、いける度に自然の奥深い美しさに少し近づけたかなと思う。

横から見た奥行き



七竈 ななかまど
芍薬 しゃくやく 撫子 なでしこ

△3頁の花▽ 仙溪

花材 七竈 (薔薇科)

芍薬 (牡丹科)

撫子 (撫子科)

花器 青白磁花瓶 (市川博一 作)

みどりひとときわ美しい季節。新緑の枝物に季節の花を添えることが多い。爽やかな風を感じる花をいけた。

横から見た奥行き



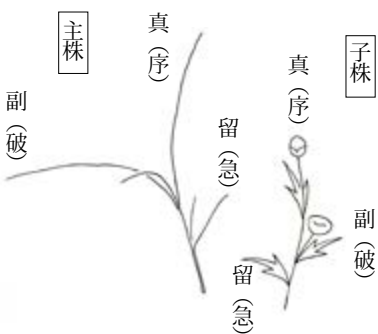


山吹 やまぶき
芍薬 しゃくやく

仙溪

花型 生花 株分け
花材 主株 山吹 (薔薇科)
子株 芍薬 (牡丹科)
花器 黒釉陶水盤

山吹は薔薇科・山吹属。切り枝では草花のような印象だが落葉低木である。黄色い花をつけた枝が優しく広がる。万葉集にも詠まれ、山吹色という色の名前にもなっているように、古くから親しまれてきた花だ。株分けにとり合わせた芍薬は二重咲きの「さつき」という国産品種。外国産の大輪種よりも和の雰囲気を感じる品種が山吹には似合っている。





立花秘傳抄 一

常磐木之部 (つつき)

花

花の字、上艸にして下化を用いる。化は造化なり。天地、寒暑、陰陽、草木、皆造化の作す所なり。されば草木四季に花咲き、青黄赤白、八重二重、一草一木の花の内にも二色三色あり。赤き花も白く変じ、紫なるも色を変え、四季咲き、帰り花、皆これ変化の理なり。又曰く、無よりして有を造ぞうといい、有よりして無を化かとい



う。誠なるかな。冬枯れの草木も春は芽を出し、

夏は茂り、秋紅くれなゐにして葉落ちることわり目前

なり。和訓に云う、花は鼻なり。鼻は端なり。

草木の端に咲くによりて花と云うなり。

蔓

草のつるを蔓という。木のつるを藤と云う。



松

祝言第一の木なり。

上段中段下段に用いる。

苔晒こけあび共に付く。

王安石おうあんせきの字説じせつに曰く、松は百木の長たり、松

は公こうのごとし。故に松は公に従う。古語に云う、

木の王は松、花の王は牡丹。

異名 十八公、龍枝りゆうし、青牛せいぎゅう、蒼髯そうぜん、爰こゝに略す。

和名 千枝草ちえくさ、深見草ふかみ、十かえり花、百草はく、

都草。

蔵玉集

大内や百敷山はくしきの初代草いくとし人のなれて

そゆらん

同

春の野や雪けの沢の延喜草ひきまぐさ花咲きにけり雪

におわれて

神山のふもとに植える千世見草うえおきて

こそ御調物なれ

松の葉を松毛もうと云い、松の花を黄松花おうしょうか、また

松蕊しょうずい、松の笠を松毬きゅう、三針なるを括子松かつし、五針

なるを松子松。

立花に用いる名 男松、女松、若松、緑松、

禿松、岡松、五葉の松、引松、茶釜松、枯松（あ

か松とも云う）、こけ松（葉青くして先赤きを

云う）、しらが松（枝松の白きをいう）、かこい松、

根じめ松。

若松 わかまつ

相生いしん、合わせしん、二つしん、直しん
又は除心にも用いる。

祝言第一の松なり。



笠松 かさまつ

直心除心に専ら用いる。みきのくるいように
て花形さまざまに替わりあり。若松に次ぎて目
出度き松なり。風を持つ枝とて口伝あり。



緑松 みどりまつ

直心除心に用いる。下に必ず松をあしらいて、

その松よりみどり立ちたる景気かんようなり。

又下の古葉すきともぐべからず。古葉なくて緑
立つことなし。あるいは請副にも木ぶりにより
て用いる時は、まず直なる緑を立て置いて、そ
の横へも出すべし。出生直なる道理を瓶にあら
わすものなり。



引松 ひきまつ

出生小木にて漸く下より遣い上せて中までは
苦しからず。近代正心、請、副に用いるといえ
ども、巧者の好まざる所にして景気あしきなり。



胴作り、前置に用いるに口伝あり。

松笠 まつかさ

外の松に松笠を養い用いるに、枯葉枯枝にた
より松の葉のいろいろに随いて、景気げにもら
しきように持ちうべき。一色物同前。



禿松 かむろまつ

大きなは心にも用いる。中は正心、小はか
こいによろし。水際には用捨すべし。この松い



つも替わらざる姿にて、正心よりほか作意なし
とて、近代さのみ不用といえど、花形無量なり。
工夫を以て立てるに珍しき一手なきにあらず。

かこい松

小松の葉のこみたる、又はみどり松のちいさ
き、かぶる松などをわらにてまき、或いはふの
りでかため葉をふせ、きれいにして出生すぐな
るを豎につかい、横なるをわきへ遣うべし。

かこい松といえは見苦しき所をふせぐ物とば
かり思いては、花名人になりがたし。たとえば
心の後ろをかこうては松の縁をつづけ、或いは
間あきをふさぎては松のうつりを取る。皆これ
景にあらずと云う事なし。



根じめ松

小松枝松の葉のよくこみてきれいなるを水際
に用いる。古来松、檜の二木は峰よりふもとま
で一面に生える物とて、その気色をうつす。又
心、請におもき物指す時は、下に必ず松檜など
のおもき物にて根をしめざれば花形よくすわら
ざるなり。



松は祝言第一の物なるに、松斗(?) えんを
切りて指しても苦しからずと云えり。縁の切と
云うるは不吉の言葉にして、尤も嫌うべきに心

得がたき事なり。その道理如何にと尋ねるに、
その返答種々あるといえども一つとして道理に
叶わず。されば近代名師の中に松ノ縁を切りて
指すこと大きに嫌うあり。それ松は百木の長た
り。松は公のごとく、公は摂政関白の位にして
天子に替わりて国を治める官なり。然るに百木
の長たる松、立花の法式をみだして万民の下草
おさまるべけんや。

男松、女松、五葉、引松、そのほか品替わり
たる松は、一種一種縁を切りて指しわけること
古来の法式なり。これを以て同種の松も縁の切
りて苦しからずといえるか、名師に会ってこの
理を尋ねべし。

松の前置は三ヶの前置のその一つなり。相伝
と手練なくては立てるべからず。たとえ見覚え
聞き覚えたりと云えども、似たる事の似ぬ事な
るべし。



虫狩^{むしかり} オクロレウカ

仙溪

花型 生花 二瓶飾り

花材 主瓶 虫狩^{むしかり} (忍冬科)

別名: 大亀の木^{おおかめのき}

副瓶 オクロレウカ (菖蒲科)

ムシカリと杜若 にしたかったが、オクロレウカを小振りにいけて添えてみた。二瓶を選ぶのが意外と楽しい。



素溪 (健一郎) が華道京展に出品した躑躅は、その後家で元気に花を咲かせている。レモンちゃんはその花器の水を飲むのがなぜか好き。



第 67 回 華道京展 「和 テイスト 大人の文化」 4月7日(休)～12日(火) 大丸ミュージアム〈京都〉





④



③



⑤

第 67 回 華道京展「和 テイスト 大人の文化」
4月7日(木)～12日(火) 大丸ミュージアム〈京都〉

私がいけた藤は、初日にはほとんど色がなかったが、6日間伸びつつ咲きそろってくれた。切らずにおいた花ほどの強さはないが、会場で頑張ってくれたことがとても嬉しかった。撤花したあとも持ち帰って短くいけ直し、さらに数日、甘い香りを楽しんだ。

水揚げ法は口伝。直接私に聞いてください。 仙溪



出逢い花（29）

仙溪

もっこうばら
木香薔薇（薔薇科）
しらん
紫蘭（蘭科）

四月中頃から五月初旬にかけて、街中では思いがけず見事なモッコウバラに出くわすことがある。岡山天満屋での花展中にも、天から降りそそぐようなモッコウバラに、とある露地で出逢った。花展会場では庭で咲いた紫蘭をいけている人もあり、この出逢い花をいけた後だったので、確かに同じ頃の花なのだとほっとしている。

いけばなとぶらぶら露地歩きは、こんなふうに繋がっている。花をいける人にはそれぞれにそれぞれの出逢いと繋がりがあるんだと思う。だからいけばなは楽しい。

花器 素焼小壺

陰陽五行

私達人間も自然の一部。前回紹介した陰と陽の性質や働きを繰り返して、また調和を保つことで生きている。素朴な例をあげれば、無意識にしている呼吸も吸って吐いてを繰り返しているし、「むすんでひらいて♪」のようにグーとパーを繰り返すことで血行が良くなる。活発な昼のあと穏やかな夜があるからまた一日頑張れるというように。私達には陰と陽の両方が必要なのだ。（つづく）

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2017 年
5 月号
No.647

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





裏白の木と芍薬

仙溪

花材 裏白の木(薔薇科)
しやくやく、ぼたん

芍薬(牡丹科)
かわらなでしこ

河原撫子(撫子科)
せいじ

花器 青瓷花瓶(清水卯一作)

花屋ではヤマナシの名前で出回るが、本当の名前はウラジロノキで、春から初夏の緑白色の若葉をいける。また希に秋の実もいけることがあるが、1センチほどの大きさで、リングを小さくしたような赤い果実である。

ウラジロノキとシャクヤクは相性がいい。作例では茎を深く挿したくて、花が前方へ向いてしまったが、できれば上向きに使用したい。但し充分に水揚げをしておき、さつといける。いけた後も小まめに水切りしたい花材の一つだ。カワラナデシコで華やぎを加えた。



横から見た奥行き



薄暑の花

櫻子

花材 花水木（水木科）

イリス・オクロレウカ（昌蒲科）

花器 陶花瓶（メキシコ人作）

八重桜が終わる頃、春の花会などの行事が一段落するせいか少し淋しい気分になる。そんな頃に一齐に咲き始めるハナミズキのお陰で又気分も新たになれるのが嬉しい。夏の最初、「薄暑」だ。初夏の服に着替えて、颯爽と出かけなければ！

水木の仲間では花が美しいので、ハナミズキと呼ばれている。初夏の日差しを受けて新緑の輝きが増す中で、枝を横に広げてのびのびと目立つ花を咲かせてくれる。投げ入れてそんな風にいけてあげたい。

オクロレウカはギリシャ語で、Iris（虹）Ochroleuca（黄色みを帯びた）という意味。トルコ原産のヤマメ科の多年草で湿地に育つ。

今年は花菖蒲に代わってオクロレウカの方が花も葉も育ちが良く、お稽古花としても何度もいけさせてもらえた。

五月晴れの爽やかな青空を背景に元氣いっぱい咲いてほしい。



横から見た奥行き



プロテア・メリータイム

仙溪

花材 プロテア・メリータイム

(ヤマモガシ科)

薔薇 (薔薇科)

ピットスボルム (トベラ科)

花器 ガラス花器

新しい花材を使った作例。プロテア・メリータイムは南アフリカ原産。ピットスボルムはニュージーランド原産。



横から見た奥行き

立華時勢粧^{りっかいまようすがた}を読む ③4

立花秘傳抄 二

花之部 (つづき)

梅

祝言。上中下。

又作呆象子在木上也

梅乃杏類 故反杏為呆

唐名 氷肌^{ひよつぎ} 玉骨^{ぎょつこ} 花兄^{かけい} 花儒者^{かじゆしや}

和名 初名草 香栄草^{かばえぐさ} 風見草 春つげ草

緑の花

古歌

万代に咲るなかにも初見草春をまたてや

花を見るらん

深山には見雪ふるらし難波人浦風しほる

香はへ草かな

山里の軒端にさける風見草色をも香をも

誰見はやさん

冬の内は心に立つべからず。冬至梅の白梅に

先立ちて、枝短く立たるはにほいふかく、白き

梅の苔木に立て合せてほのかなるは、時節相應の気色にて目もとどまり、珍花のあしらいとも名付くるなり。

うけさせ、請の梅は控枝にうつし、副の花は流枝に見合せて働きあるように指して、又一瓶の梅、合て一木の気色に立つべきなり。

梅は木つき風流に、枝ぶりはたらき有るをよしとす。絵師の云う、桜は花を画き、梅は木をえがく。又曰く、松に三景あり、梅に八景あり。又詩にも疎影横斜^{そえいおうしや}とあれば、この心をもつて瓶上にその姿をうつすべきなり。

紅梅を遣う時は白き椿を用い、白梅を指す時は赤き椿を用いる。

紅梅と白梅と二瓶に指合^{さしあ}う時、盛り^{さか}の花の方

白梅に水仙を立合する時は、赤き物にて色を切り、又梅に遠ざけて立つべきなり。

を上に指し、残花をば下に指すべし。紅梅は紅梅、白梅は白梅と、おのれおのれのはたらき有りて、混乱せざるように指すべきなり。又請の方へ白梅ばかり、控枝の方へ紅梅ばかり、一方づつに指す手もあり。梅のずわいをつかう時はたとえその縁遠くとも本木より出たるように、うつり面白く指すべきなり。本木なくては、ずわい遣うべからず。

ある人問う。それ梅は諸木の兄、百花の長たるに、何とて一色には立てざるや。答えて曰く、松桜楓は高山の物にしてさらに余木をまじえず。一面のけしきあるゆえなり。梅は林園の物にて、類木をもつて、一面に生えることなし。故にその景気よろしからず。大庾嶺^{たいゆれい}万株^{まんしゆ}の梅ともいえず、それは我が朝の景気ならねば瓶上にはうつしがたし。

梅の心は下へ遣いさげ、上の勢いを下の梅に

立花秘傳抄・花の部では、桜の次に梅が登場する。「立花時勢粧」の百十八ある図のうち、梅は約4分の1の30図に描かれている。ちなみに前号までに紹介した中ですでに14の図に梅が描かれていた。

真に梅を使つた立花は5図ある。その一つ、第25図では垂直に立ち上る真、さらに請のつやとして白梅が使われている。梅の垂直の幹が、左右の松の特徴ある枝の動

きを際立たせている。とり合わせの水仙は白梅と隔てて使われ、赤い葉の小枝と赤椿で色が添えられている。

もう一作よく似た構成の第62図を紹介しておく。こちらは松の直線と紅梅の曲線の対比が見事だ。左に大きく立ち上る紅梅の枝。この枝を生かすために、極めて自由に花形を工夫している。細い枝の動きと、大きく空いた空間の枇杷の葉が絶妙なバランスを作っている。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第二巻 立華時勢粧』

(日本華道社刊)

『花道古書集成 第一期第一巻』

(大日本華道界刊 思文閣出版刊)

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』

(思文閣出版刊)



第二十五図

立花 梅直真

竹葉軒治兵衛

梅 松 晒木 熊笹 柘植 椿

水仙 枇杷 嫩



第六十二図

立花 松除真

中野宗左衛門

松 水仙 梅 枇杷 柘植 嫩

夏櫨

へ表紙の花 仙溪

花型 生花 草型 留流し
花材 夏櫨(躑躅科)
花器 ペルシヤ緑釉花器
(宇野仁松作)

表紙の生花はナツハゼである。撮影した後、華道京展に出品した。細枝が複雑にからみあった立派な枝



だったが、おそらく特別な育て方がされたのだろう、枝は粘り強く、3週間経った現在も、家の玄関で元気に葉を茂らせている。

もちろん水揚げには注意を払っている。足元はよく割り、皮を削っている。そして幸いにも、ほとんど挽めずに美しい姿になってくれた。この木を何年もかけて育てた人と、それを私に届けてくれた花屋、そして私。そんな繋がり感謝せずにはいられない。

華道京展では敦盛草との二瓶飾りで出品した。(写真①)

アツモリソウは青いカットガラスにかけたが、広い流派席の中でキラリと際立っていた。会期後半に白根葵に変えたが、どちらも好評をいただけてはっとしている。

器の選択は副家元と相談することが多い。二人で考え、良い組み合わせになった時、喜びを分かち合える。

夏櫨

紫蘭

(写真②)

仙溪

花型 生花 一種挿し
花材 夏櫨(躑躅科)
紫蘭(蘭科)
花器 青彩陶花瓶(藤平正文作)

表紙の夏櫨の生花をいけた後で、使わなかった枝を用いた一作。

平安神宮献花大会(4月14日)16日、平安神宮額懸に出品した花である。



くりと生花の形に留めてから、刈り込んでバランスを整えた。

白地に青い模様の器に若葉の緑、そこへ薄紅色の紫蘭を2本のぞかせて、季節の色を加えた。

レモンちゃん

と庭のホウチャクソウ(宝鐘草)。



第68回華道京展「風・流」
4月6日～11日 大丸ミュージアム（京都）

⑤



③



⑥



④





木苺と芍薬の生花

△10頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 木苺（薔薇科）

子株 芍薬（牡丹科）

花器 紺色釉水盤

木苺（種名は構母^{かいつち}）は出荷量も増えてきて、若葉の時期に生花にもできるようになり、白い花が次々に咲いてくれる。黄色くなつた葉や、花や蕾が萎れたらこまめに取り除く。子株には小型の花を選び、季節の彩りを添える。

夏櫨の立花

△11頁の花▽ 仙溪

花型 除真立花

花材 夏櫨（躑躅科）

山芍薬（牡丹科）

裏白の木（薔薇科）

下野（薔薇科）

姫百合（百合科）

撫子（撫子科）

擬宝珠の葉（百合科）

花器 紺色釉水盤

立花研修会の作例。正真のヒメユリと請のヤマシヤクヤクは受筒に挿している。ヤマシヤクヤクの実が花材として栽培されるようになったおかげで、希^{まれ}に花も切り花で売られる。ギボシで受筒を隠したため、写真では不自然なシルエットになつてし



まった。ギボシは低い位置のみに使うべきと反省。この作例であれば、受筒は小葉の葉蘭や蒼我、檜扇の葉で覆うようにすればよかっただろう。



クロウフィッシュの器

桜子

花材 カラー(里芋科)

カーネーション(撫子科)

玉羊歯(玉羊歯科)

花器 絵付陶鉢

ニューオリンズでは冬が終わり暖かくなり始める春頃からクロウフィッシュ(ザリガニ)のシーズンが始まる。釜茹でした真つ赤なザリガニをこの器に山盛りして、皆で味わうのだろう。

ザリガニと一緒にコーンやジャガイモ、ネギ、ニンニク、レモンも描かれている。レシビを忘れてもこの器を見れば買い揃えるものを忘れない。きつと待ちどおしい旬の器なのだろう。

そんな器に花をいけるなんて、ニューオリンズの人はどう思うかしら。両親が買ってきてくれた器なので、花器としてずっと大切に扱っている。

苞の大きく開いたカラーとギザギザな花弁のカーネーション、玉羊歯。5月の旬をいけてみた。

横から見た奥行き



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2018 年
5 月号
No. 659

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ビバーナム スノーボール

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ビバーナム (忍冬科)

鉄砲百合 (百合科)

レナンセラ (蘭科)

花器 赤色釉花器 (宮本博作)

長くて綺麗なビバーナム。こんなに長くいても一週間しっかりと元気に咲いてくれた。足元を割り皮を削ってしっかりと剣山に挿す。水は毎日足して出来るだけ澄んだ深水にしてあげる。

一週間後には他の花も切り詰めて短く投げ入れに生け替えたが、まだ日持ちしてくれている。

ビバーナムは水が下がりやすいと言われるが、花が機嫌良く心地良ければ長く楽しめる。アジサイに近い花でオオデマリにも似ているが葉が柔らかく瑞々しい。花は緑色から白へと変わっていく。倉敷のお弟子さんが四月の花会でいけておられたビバーナムは大きくて真っ白のアジサ



横から見た奥行き



横から見た奥行き

イの様だった。ヒョウタンボクの間から溢れる様に咲くフワフワのビバーナムが印象的ないけばなだった。

シヤガの葉

△2頁の花▽ 仙溪

花材 アガパンサス (彼岸花科)

薔薇 (薔薇科)

著我の葉 (菖蒲科)

花器 粉引陶花器 (伊藤典哲作)

シヤガの葉には独特の美しさがある。作例のようにシヤガの葉を伸び伸びといけて、優しい雰囲気の花を添えると、その花の葉のように見えて自然な感じになる。

白花のアガパンサスと赤いバラだけでもいけられるけれど、そこにシヤガの葉が加わるとより生き生きとして見える。そんな効果を狙う時は、投入で前方へ張り出し、高さをおさえるようにすること。そうするとシヤガの弾む動きが生きてくる。

ルピナス

〈3頁の花〉 仙溪

花材 ニューサイラン（竜舌蘭科）

ルピナス（豆科）

リユーココリーネ（百合科）

花器 赤ガラス花器（ウルリカ・

ハイドマン・ヴァーリン作）

ルピナスの仲間には南北アメリカ、地中海沿岸、南アフリカに200種以上が分布するマメ科の植物で、その姿からハウチワマメ（葉団扇豆、ノボリフジ（昇り藤）などの和名がある。花穂が立派なラッセルルピナスという品種がよく花壇に植えられ、切り花で華奢な品種のルピナスを見つけたので初めていけてみた。葉の水揚げはいいとは言えないが、青に赤がのぞく花色が美しい。不思議な絵のガラス器に個性的な花と葉を3種とりあわせていけると、何やらガラス器の絵たちが踊り始めそうな気配。花と器で物語が出来るが、切り花で華奢な品種のルピナス

横から見た奥行き

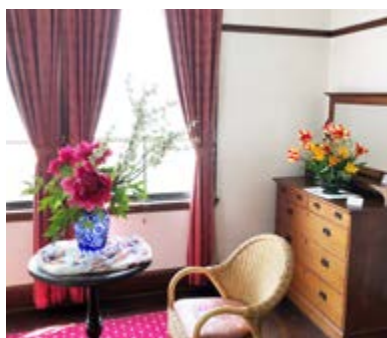


ウルリカさん

これは、両親と1993年にスウェーデンを訪れ、コスタボダ社の専属ガラス作家であるバリーン夫妻のお宅に招かれた時の写真だ。バリーン氏とウルリカさん、そして両親と、言葉はなくてもお互い表現者同士、自然に気持が通じ合っているのを傍（そば）に感じて。バリーン氏のガラス作品は神秘的な美しさ。ウルリカさんの描く不思議な人や動物たちは、奇妙だけれど温かな愛に溢（あふ）れている。彼女の器は、想像し表現することの大切さを教えてくれる。交流の中での色々なエピソードを思い出す。そんなウルリカさんが先月亡くなられた。謹んで哀悼の気持ちを届けたい。



横浜の西洋館に春をいける
4月1日～2日 外交官の家 挿花13名



立華時勢粧りつかいまようすがたを読む ④5

立花秘傳抄 二

通用物之部（つづき）

南天

祝言。上中。

その実赤うて燭火しよくかのごとし。ゆえに南燭なんしよくと名付く。

本草綱目に曰く、その種しゆこれ木にして草に似たり、ゆえに南燭なんしよく本草と名付く。

沈括筆談に曰く、南燭は草木本草および伝記説くところ人少なく識者云々。これ立花通用に使うの証文明らかなり。

異名 南天竹 蘭天竹 草木の王

南天は心請副しよくそに立てる時、かならず風をもたすべし。口伝。

南天の正心は葉の廻りちいさき実の自然と立ちたるを用うべし。



第五十三回

立花 松除真

松尾清左衛門

松 南天 柘植 水仙 檉木 千両 柏 嫩

南天の実を使うは一瓶に三房五房、あるいは七房八房つかう時は、長短前後たて横と並びかし使うべきなり。

ある師の曰く、南天と竹と、しだれ物にて嫌うといえど、しだれざる実を使う時は苦しからずといえり。しかれども竹は四季の景物なり。南天は当季の珍花なり。竹の緑のなびきたるを愛して、南燭の紅にしだれたるをわざとに立て見んも、花道の正道にあらず。

南天の胴作りという事は、古人も指しもらしたる花形なり。しかるに出生を考え、法度をよけ、花形あしらい等を工夫してあらたに指しそむるものなり。

第七十一図

立花 南天除真
竹葉軒治兵衛
南天 松 晒木 菊 小菊 柘植 椿
檜木 嫩



「南天は真、請、副に立てる時、かならず風をもたすべし」とはどういう意味だろう。風を感じるように空間を空けるということか。絵図を見てみると、南天の葉や実がたとえ風に揺れても、他の花に当たらないくらいの場がとつてある。

「南天の胴」は前例が無かったけれど、花形やあしらいを工夫して始めて立ててみた、と富春軒は書いている。そしてその絵図が第九十一図である。胴の南天はおそらく前方へ出ている。その出口を柏で隠すのみのシンプルな胴である。南天の葉の広がりや実の姿をすっきりと見せている。また、胴の南天の葉が広がるので、請上がりにして空間を空ける工夫がされている。さらに請と控枝の南天はどちらも変化のある曲がり方をしており、中央で構える南天の胴との対比に面白みがある。そのあたりが、「南天の胴」の肝ではないかと思う。

参考になっている「沈括筆談」について調べてみた。

沈括（1031、1085）は中国、北宋の科学者、政治家で浙江省の出身。博学に加えて、従来の知識人がほとんど注意を払わなかったり、記録しておかなかった事柄にも多様な関心を持って多くの著述を残した。「沈括筆談」の内容は多岐にわたるが、特に自然科学と技術の記述は、中国科学技術史上、注目すべき内容と価値を持つ。沈括が晩年を過ごした江蘇省鎮江の夢溪園の名をつけて「夢溪筆談」とも呼ばれる。

沈括も富春軒仙溪も、自然を自ら感受しその真理をつかもうとする姿勢が共通しているように感じる。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三巻 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二巻』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）



第九十一図

立花 松除貞

南天の胴 富春軒

松 伊吹 晒木 南天 柘植 小柏

小菊 著我



ツクシドウダン

仙溪

花型 生花 草の花形 副流し
花材 ツクシドウダン (ツツジ)
筑紫満天星 (躑躅科)
花器 銅花器

ドウダンツツジは山地の岩場、特に超塩基性の蛇紋岩地帯に多く見られる。日本は概ね弱酸性の土壌なので、蛇紋岩のような特殊な地質で育つ植物は限られる。そのドウダンツツジの中のサラサドウダンの仲間にツクシドウダンがあり、九州の筑紫山地に見られるのでこの名がある。花は鐘状で花冠が深く5裂する。

華道京展では投入にしたが、一種で生花にすると、幹の姿が見えて又別の趣になる。

横から見た奥行き



①



②



第69回 華道京展 「イマジン imagine ～心に描く花～」

会期 4月5日～10日
会場 大丸ミュージアム〈京都〉



桑原素溪 (写真④)

藤 松の晒木

煤竹掛花器

テーマは「イマジン」。見る人のイメージが膨らむようにと、花材の生育環境にこだわって、前期は熱帯に育つ植物、後期は日本で育つ植物をいけた。また、同じ作者の花器を使ったので、花席全体の雰囲気統一感が生まれた。前後期で近藤さんの器を3つ使ったが、洋でも和でも似合う大好きな器だ。私の花は同じ花器に異なるいけばなをいけている。器の懐の深さを感じる。

健一郎は藤に初挑戦。山の藤は松によじ昇り、藤がからみついた松は変形を余儀なくされる。そんな自然を松の晒木を使って表現してみたい、と言っていた。彼渾身の一作。

レモンだより

彼に友達ができました。最近わかったのですが、男の子です。





出逢い花（32） 仙溪

ベル鉄線（金鳳花科）
りきゅうそう（びやくふ）

利休草（百部科）

花器 手彫磁器（南繁樹作）

この花は最初に花器を決めていた。幾何学的な手彫り模様が美しい磁器で、口を尖らせた白い果実のようだ。小さな口でもいけられる茎の細い花材を探しに花屋へ行った。

まず木立性のベルテッセンを見つけたが、出逢わせる相手が難しい。出はじめたばかりのリキュウソウにふと目が止まる。

リキュウソウもかなり茎が細い。本来の名前はビヤクブ（百部）。中国原産の蔓性の多年草で薬用植物の一つである。夏でも元気に水揚げしてくれる丈夫な切り花として生産が増えてきているようだ。

リキュウソウの葉の茂みがベルテッセンを支えてくれる。よく見ると小さな花が咲いている。ベルテッセンと同じ4弁花だ。偶然の出逢い。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
5 月号
No.671

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



令和

5月1日、元号が「平成」から「令和」へ変わった。

先日、倉敷で開催された桑原専慶流いけばな展で、岡山県本部の小野樹仙会長が挨拶の中で次のように教えて下さった。

人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ

「令和」にはそんな意味が込められているそうだ。

令和の時代に華道がどんな役割を果たせるか。人々が美しく心を寄せ合えるような花を、皆さんと共にいけてゆきたいと思う。

五月梅 さつきばい
撫子 なでしこ

△2頁の花△ 仙溪

花材 五月梅（雪の下科）

撫子（撫子科）

花器 青磁花瓶（加藤敏雄作）

サツキバイとナデシコを大らかに投入にした。青磁の花瓶にいけると5月の爽やかな風を感じる。サツキバイは水切りし、足元をよく割っておく。

△ 表紙の花の解説は8頁 △



横から見た奥行き



利休梅 薊

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花株分け

花材 利休梅(薔薇科)

薊(菊科)

花器 陶水盤

リキウウバイは中国原産の落葉低木。バラ科・ヤナギザクラ属で明治時代に渡来した。

あばれた枝を生花にしたが、撓めたところもよく水が揚がっていた。アザミと株分けにしたが、相性が良さそう。

横から見た奥行き





ジョージアの角杯かくはい

健一郎

花材 プラシノキ（フトモモ科）
黄タダロリオサ（百合科）
花器 角杯（ジョージア製）

ジョージアの蚤の市のいちで手に入れた
ワインを飲む角杯。ホテルの部屋
ではラッパスイセンを飾って楽しん
だ。赤ワイン色のプラシノキがよく
似合う。



横から見た奥行き



ジョージアの国旗。アナヌリにて。

卒業旅行

健一郎

大学生生活最後の春休みにあたり私の卒業旅行という名目で初めて家元と服家元と3人だけで旅行をしてきた。大学の成績が1単位足りなかったので実際の卒業は半年先だが。

旅行先はワインとパン、ヨーグルト発祥の地であるジョージアという国。目的は食事、自然、芸術だ。元ロシア領で旧国名はグルジア。黒海とカスピ海に挟まれたコーカサス地方にある。交通の要衝であったため古代から諸外国の侵略を受けてきたが、ソ連崩壊とともに1991年共和国として独立した。

未知の国なので3人とも好奇心を否応なく刺激される。首都トビリシの地下道に落書きがあった。



「ムンクや!」

「壁に落書きをしないでってこと?」

「権力にペンで対抗してる絵かな?」
「いんでペンでんす? (独立の意)」
『叫び』は不安や絶望を象徴してるから、ひよつとしたら政府が市民たちの反乱で、てんでこまいになってるんっちゃうか?」

感じた事をテンポよく言い合うので複眼的に物事を捉えられる。単眼になりがちな私にはちょうど良い。

トビリシからの日帰りツアーを現地で申し込んで小型バスに乗る。鳥の糞が媒介となつて他の木に寄生するヤドリギという植物が、同じ種類の木に数多くできていたのを疑問に思つた。すぐさま2人に質問をぶつけてみた。

「鳥がお尻を拭きやすいからかな?」
「木も選んでるんでしょ」
「宿りやすい木があるのと違う?」

様々な意見が出てきてさらに考えが広がる。事実はどうだつていい。実際に自分達が鳥や木の気持ちになつて考えてみるのが面白いのである。家元が演じる鳥の気持ちと、服家元が演じる宿られる木の気持ち、そして私のヤドリギのタネの気持ちはインターネットには載っていない。それぞれ一役終えるともた頭の途中で各々、別の役になる。3人のそれぞれに偏つた知識と想像力を、俯

瞰してみるのが面白くて楽しい。

旅行に出かけると様々なアイデアが生まれる。時間を気にしないで生活できる旅行は心にゆとりを持たせ、普段気にも留めないことにも関心を抱く。私が思うに忙しい空間では芸術は発展しにくく、想像力も働かない。普段は意図して時間を作り御所なんかを散歩して満足してみるが、旅行はやはり特別なものである。できればその旅行は分刻みで有名な観光地を巡る観光の旅行ではなく、その地域の人とコミュニケーションを取つてみたい、その地元の人を実際にしてる生活をのぞいて見ることがより好ましい。新たな価値観や感性を垣間見ることができるといい。もつとも観光地の中でもその人の持つ技量によつては美的感性を磨くこともできる。

ここ最近、私の旅行に行く目的は感性を豊かにすることにある。非日常の空間では多くの発見がある。今年の春の8回の卒業旅行では、特に意識することができ、様々なものに想いを馳せてきた。有機物も無機物も関係ない。多角的に物事を捉える練習をしている。まだ22年しか生きていないが、今のところは人生の豊かさは「感性の豊かさ」にあると考えている。お金と違つて使つても使つても無くならず、使えば使うほど豊かになっていくのも気に入っている。そしてそれは自分の頭で考え

られなくなるまで貯蓄できるらしい。

心の動きの分かりやすい指標として涙というものがある。一般的に感情の涙というものは感情が高ぶつた際に最も多く分泌されるらしい。

競争心が強い私は弟の順之助にボーリングで負けるとトイレに行き目を腫らして帰ってくる子供だった。私の強かつた私はそれで以降もほとんどが悔し泣き。ところが去年の夏のマンチェスターで木の枝をきらせてもらった時に号泣してから、悔しさ以外のことで目に涙を貯める事が多くなった。昨日は三条通商店街で「よさこい踊り」をしている懸命さに目頭が熱くなった。なんて楽しそうなんだろう。そこから広がるその人のストーリーを想像してしまう。

いつかなんでもない空を見ただけで涙を流せるようになる日でもくるのだろうか。ただ美しいだけで涙した経験がまだ無い。それは美しいものを見ていなかつたのではなく、美しいものを見れる自分にまだ成れていないからであろう。

なんでもない空に涙する人が生けた花はどんなに強く、美しいのだろう。

半年留年してできたこの時間に、感動の敷居を下げる訓練をしようと思つた。



ジョージアの東端 シゲナギのボドウベ修道院。グルジア正教会は厳粛なので、女性はスカーフ、スカート姿でないと入れない。



「ワインを飲む人」の銅像。原型は紀元前7世紀のもの。角杯を持って宴席を盛り上げる役目の人だそうだ。トビリシにて。

立華時勢粧りっかいまようすがたを読む(57)

立花秘傳抄 三

草之部 (つつき)

鶏頭けいとう花

祝言。心、正心。

鶏冠花けいこうげ。掃帚そうしゅう、扇面せんめん、瓔珞等ようらくの名あり。皆ほつき おぎのおもて

この花の形を以て名付く。

鶏頭自然と横へ生えたるあらば、副にも用いる。心、正心にかぎらず、三本立てる時は二本は同色、一本は色かわりても苦しからず。三本ともに色をかゆる事をきうつ。

鶏頭は花おもき物ゆえ、心に用いる時はひくく立つべし。正心に用いるは扇面を取りまぜ遣うべし。花の丸きばかりははたらきなし。梅もどき、水木などに立て合わせる時は、白色黄色を用うべし。

旋覆花おくるま

祝言。水ぎわ。

多識に、かまのつば (小車高き草なりといえども古来水ぎわに用い来る。)



第六図

立花 鶏頭直真
直心立之内草之花形 富春軒仙溪
鶏頭 柳 梅擬菊 夏はぜ 擬宝珠
檉木 檜扇 伊吹

黄精おうせい

祝言。水ぎわ。

和名、おほえみ。あふし。

蒲公英たんぽぽ

祝言。水ぎわ。

多識に、たんぽぽ大丁草。

異名、きんさんそう金簪草。

紅花

祝言。中より水ぎわまで。

多識、紅藍花。

和名、すえつむ花。

だんどく花

非祝言。心に用いる。上中。

心に立てる時は正心に立て、或いは副下、

請下へ葉ばかりをあしらうべし。うこん草同

前なり。

※参考文献

『いけばな美術名作集 第三卷 立華時勢粧』（日本華道社刊）

『花道古書集成 第一期第二卷』（大日本華道界刊 思文閣出版刊）

※立花図転載

『華道古典名作選集 立華時勢粧』（思文閣出版刊）

第五十図

立花 鶏頭直真

恭圓

鶏頭 芦 菊 薄 梅 擬 柘 植 松
晒木 檉木 柏 檜 著我



貝母^{ばいも} △表紙の花▽ 櫻子

花材 貝母（百合科）

海老根（蘭科）

都忘れ2色（菊科）

花器 陶水盤（モロッコ製）

倉敷の叔母宅には月一度の稽古で訪れるが、特に春は庭の花々を見るのが楽しみ。珍しい椿や林檎、花梨といった果樹の花も華やかだ。

高台にあるリビングの前庭には大きな木が茂っていて、その足元でバイモが70センチほどの背丈で咲いていた。花は小さくて地味な色なのにとても存在感があつて可憐。いくらでも持つて帰つてと言ってくれるので、沢山切らせてもらった。

バイモはユリ科の中では一番早く咲くらしい。葉の先端が細長く巻きひげのようになるのが可愛い。球根が大きくなると貝が合わさったように見えるので貝母と名づけられたそうだ。

叔母の庭で育つ貝母は花屋さんでは買えない大きさなので足元には春のエビネランとミヤコワスレをいけた。



横から見た奥行き



第70回 京友禅競技大会 插花

松除真立花

仙溪

花型 松除真立花

花材 松(松科)

晒木

桃(薔薇科)

椿(椿科)

紫蘭(蘭科)

橘(蜜柑科)

花器 銅立花瓶

元禄時代の京都において人気を博した扇絵師、宮崎友禅斎の描く画風を着物の意匠にとり入れたのが友禅染めのはじまりとされる。この手描友禅に対して、明治時代以降には型紙に模様を彫って染める型友禅が加わり、京の友禅染めは飛躍的な発展をとげた。

京友禅協同組合からのご依頼で、京友禅の展示会に、京都いけばな協会から会長の私と芦田一馬常任相談役が插花させていただいた。

私が白地の着物の前に松の立花を飾り、芦田先生が黒地の着物の前に桜の生花をいけられた。芦田先生の桜の生花は、まさに着物に染められた絵柄のように美しかった。

展示会場にはインクジェットで染めた着物もあつて驚いた。着物の普及に一役買うだろうが、大切なのは作り手のセンスなのは間違いない。着物もいけばなも、伝統を現代に生かそうとする情熱と、基本を習熟した上での洗練された感覚が求められる。

第70回 華道京展

テーマ 「始まりは今、華道」

会期 4月4日(木)～9日(火)

会場 大丸ミュージアム(京都)

【流派席 前期展・後期展】11頁

【1人席 前期展】

桑原健一郎(前期展)

木瓜除真立花

木瓜満天星 貝塚伊吹

九輪草

銅立花瓶

写真① 正面

写真② 裏面

第70回の記念展にあたり、京都の芸術系4大学の陶芸作家に日頃の作品を出品いただいていたなどのコラボや、表裏両方から見る事が出来るいけばなに挑むなど、いけばなの可能性を探る花展となった。

健一郎の小品立花は本人にとって良い経験になったようだ。京都精華大学の家山さんによる作品のお蔭でユニークないけばなが生まれた。

キャスケード・シンビジウム
スプレングリー
コスタボダ赤色ガラス花器
(モリカ作)



写真①②

二方正面小品立花

小さなサイズの立花は立てるのが難しいが、なかなか味わいの深いものである。そして立花を後ろから見た姿の意外な美しさも、自分で立ててみて初めて感じる事ができる。花の後ろ姿もまた美しいものである。バランス良く立てられた立花はどこから見ても景色になっている。

京都東山花灯路2019

仙溪

会期 前期3月8日～12日

会場 円山公園枝垂れ桜前

花材 連翹(木犀科)

雪柳(薔薇科)

エビデンドラム(蘭科)

花器 陶花器

力強いレンギョウの太枝は強風にも耐えて5日間精一杯咲いてくれた。





【 流派席 前期展 】

陶芸作品コラボ（家山美祈作） 山帰来の根 鉄線5種 赤色ガラス花器
 海棠桜 雪柳 板屋楓 彩泥花器（宮下善爾作）



【 流派席 後期展 】

陶芸作品コラボ（家山美祈作） 晒木 チランドシア2種
 ネリネ オンシジウム ベゴニア 碧色陶花器（竹内真三郎作）
 満天星 杜若 乙女百合 晒木 緑釉陶コンポート（宇野仁松作）



落葉松と芍薬

仙溪

花材 落葉松（松科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 煤竹手付籠（公長斎小菅）

カラマツの芽吹きを初めて見たとき、イソギンチャクのようなと思った。なんとも愛らしい姿である。カラマツの生まれたての若葉を見守るように、濃赤色と薄紅色のシャクヤクを添えた。飴色の籠が優しく受け止めてくれている。

横から見た奥行き



レモンだより

シャガの花とレモンちゃん。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
5 月号
No.683

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





芹の花

△表紙の花▽ 櫻子

花材 レースフラワー

「ダウカスボルドー」(芹科)

胡蝶蘭3種(蘭科)

花器 レースガラス花瓶

軽くて柔らかなレースフラワー「ダウカスボルドー」中々見かけない珍しい色の花。大切にしているレースガラスの器に飾った。この花器に花を飾ると花全体が貴婦人の様な雰囲気になる。コチヨウランも特別なものを取り合わせて。足元をクロスさせて器の中の茎を見せない様にしている。



白牡丹

△2頁の花▽ 櫻子

花材 牡丹(牡丹科)

薊(菊科)

八角蓮(目木科)

花器 煤竹手付籠

今日咲きました!というところをばつと切らせてもらってハツカクレンとアザミを取り合わせた籠花。ポ



タンの花が大輪過ぎて挿す場所が中々決まらなかった。ストレスを感じさせない様に気を遣いながら…。



2種類の白い花

△3頁の花▽ 仙溪

花材

虫狩(忍冬科)

芍薬(皐月)(牡丹科)

白花撫子(撫子科)

花器 耳付陶花瓶

いけることで心が野山を駆け巡る。ムシカリもそんな枝の一つだ。山の清らかな空気や澆刺とした生命を感じる。シャクヤクやナデシコも出始めた。白い花が2種類になったが、かえって白色に思いが込められたように思う。





柔らかなみどり

△4頁の花▽ 仙溪

花材 裏白の木（薔薇科）

透し百合（百合科）

都忘れ（菊科）

花器 葉文陶花瓶（伊藤典哲作）

桜が散り、新緑の季節を迎えると、様々な緑が目を楽しませてくれる。ウラジロノキの葉の緑白色は柔らかで優しい。若葉の始めの頃にいけるので、シャクヤクやバラなど葉の茂った花と取り合わせたい。

淡いピンクのスカシユリと紫色のミヤコワスレを合わせた。撮影のあと百合の花が大きく咲くといささかバランスが悪くなったので、百合は短く生け直した。いけばなは臨機応変に楽しめばいい。

横から見た奥行き



くらしの文化を楽しむ
華道

桑原専慶流十五世家元
桑原仙溪

自然の美しさを器に凝縮する
それがいけばなの魅力

自然の美しさを切り取って器に入
れることで、そこに新しい命が芽生
え、新たな物語を語り始める。器の
中の花一輪が、まるでマジックのよ
うに自然の真理を物語る。それがい
けばなの魅力です。

そもそも「花を生ける」という文
化は中国から伝わり、日本で日本的
なものに進化を遂げました。その成
り立ちには、自然を依り代として崇
拝する樹木信仰など、日本人が培っ
てきた自然を敬う心、自然に対して
神秘的な魅力を感じる独自の感性が
影響しています。中でも桑原専慶流
は、元禄時代（十七世紀）、桑原富
春軒仙溪によって京都で創流されま
した。立花の名手だった流祖の仙
溪は、「型」が重視された当時のい
けばなの潮流に対し、梓にはまら
ない自由な気風を大切にしました。
1688（元禄21）年に仙溪が著し

た「立花時勢粧」という8巻からな
る花伝書はその後の華道の歴史にも
大きな影響を与えています。

自然の美しさを器に凝縮して表現
するのが立花の醍醐味。桑原専慶流
では、代々植物の持ち味を生かすこ
とを大切にしながら、流祖の自由闊
達な気風を受け継ぎ、新しいいけば
なの創造にも挑戦し続けてきまし
た。十五世家元を継いだ私も、花を
大切に思い、「どうしたらその花を
生かせるか」と考えながら花と向き
合っています。

心を込めて生けた花が
人と人の心を結びつける

いけばなの最もすばらしいところ
は、「和」を作り出せるところにあ
ると私は考えています。無機質な部
屋でも花が一輪飾られているだけ
で、ここに気持ち良い風が吹き抜
け、その場の空気がふわりと柔らか
くなる。誰もそんな経験をしたこ
とがあるのではないのでしょうか。た
だきれいに見せることが重要なので
はありません。大切なのは、自然を
敬う気持ち、花を大切に生かす心
を持って生けること。そうして自然と
心を通わせてきた日本人の心のあり
様が、その場に「和」をもたらし
ます。そうした力がいけばなにはありま
す。

たとえば言葉の通じない相手とも
いけばなを通じて心を通わせられる
から不思議です。私自身、海外でい
けばなを披露する中で、幾度もそん
な経験をしてきました。グローバル
化が進む現代こそ、世界の人々とコ
ミュニケーションを取り、「和」を
もって世界とつながる上で、いけば
なが大きな役割を果たせるのではな
いかと考えています。

千年以上もの間都だった京都に
は、全国から質の高いモノや技術が
結集し、豊かな文化が育まれました。
そうした多様な文化が出合って化学
反応を起こし、新たな文化が創造さ
れてきた歴史があります。私の若い
頃にも異分野交流を通じて自己研鑽
する機会がたくさんありました。が、
今の時代は、そうした機会も心の余
裕も減っているように感じていま
す。豊かな文化もその担い手である
一般市民の方々の心が豊かでなけれ
ば次代に伝えることはできません。
京都が多様な文化が混ざり合い、未
来に新たな文化が生まれるところで
あってほしい。私もいけばなを通じ
てそれに貢献していきたいと考えて
います。

「京都文化力プロジェクト実行委
員会」発行の情報誌より内容転載。



①



『慕婦繪々詞 巻8』より 貞和4年(1348年)春、桜を花瓶にたて置き、善如と覚如が互いに歌を贈り合う。

『慕婦繪々詞』 つづき

仙溪

『慕婦繪々詞』(1351年)には鎌倉時代末期から室町時代初期(南北朝頃)の様子がリアルに描かれているので、その当時、花をいけることがどのようなにされていたかを窺い知る手がかりになる。

巻8では、青磁の大きな花瓶に姿美しく一本の立派な桜がいけられている(①②)。覚如の孫(のちの浄土真宗本願寺派第4世宗主 善如)が、自分の数え年16歳となる日、外の強い風で散ってしまいそうな桜を少しでも長く見ていたいと手折って部屋にいたものだ。その美しさに見入る祖父の覚如。歌の中で「立て置く花」という言葉も使われている。また、卓の後ろは板戸で、軸を外して花を真ん中に置いているのが興味深い。

続いて巻9からは二つの場面を紹介

②



③



④



⑤



『慕婦繪々詞 巻9』より 貞和6年1月、光長初七日の法会。

⑥



『慕婦繪々詞 巻9』より 善照尼の墓参で西山久遠寺へ。





『春日権現験記 巻11』より



8

8世紀からの春日明神に纏わる様々な出来事が描かれているのだが、中でも奈良興福寺で行われた維摩会ゆいまえの描写（⑦⑧）が興味深い（1159年？）。講堂の三尊仏の前卓には華瓶けぼんに立てた花が供えられ、また老僧と菩薩が向き合うその前にも同じ華瓶が置かれている。そしてその菩薩像

『春日権現験記絵』 仙溪

鎌倉時代後期の『春日権現験記絵』（1309年）もデジタルコレクションで模写が公開されている。左大臣・西園寺公衡が藤原氏一門の繁栄を祈願するために春日明神から受けた加護と靈験を綴った絵巻物で、当時の習俗を垣間見ることが出来る。

8世紀からの春日明神に纏わる様々な出来事が描かれているのだが、中でも奈良興福寺で行われた維摩会ゆいまえの描写（⑦⑧）が興味深い（1159年？）。講堂の三尊仏の前卓には華瓶けぼんに立てた花が供えられ、また老僧と菩薩が向き合うその前にも同じ華瓶が置かれている。そしてその菩薩像



9

廻まわって描かれた絵巻の描写はそれぞれの時代を正確に描いていないかもしれないが、少なくとも鎌倉後期にどのような花瓶に花が挿されていたかを考える貴重な資料である。

巻15には、部屋の隅に紅葉した楓の枝が挿された青磁の花瓶が見える。時は元仁元年（1224年）11月、夢の中に鹿が現れて病が癒え、大切な仏事を遂げることができた僧の話だ。鹿は春日明神の使いであり象徴として描かれているが、目を引くのは花瓶に挿した楓だ。

は手に花を持ってまさに今花を挿そうとしているかのように見えるではないか。（巻11）



10

『春日権現験記 巻15』より



『ホンモノ』

健一郎

たくさんさんのホンモノに出逢うべく始まったパリの美術館巡り。その中でも一番の人気を誇っていたのはやはり、レオナルド・ダ・ヴィンチの『フ・ジョコンダ』（モナ・リザ）であった。開館直後、閉館間際でない限りゆつくりと眺める事は難しいだろう。次から次に人が流れこむ。だが一つだけ作品よりも気になったことがある。流れが異様に速い事だ。ほとんどの人は写真は撮りさえすれば、次の絵を見に行く。ベルトコンベアーの作業員のように事務的な作業にも見えた。絵の写真を次から次へと撮っていく姿は冷たかった。スマホの中のモナリザはどれほどの価値があるのだろうか。

ネット上で検索した画像の方が、よほど画質がいいだろう。拡大印刷でもすれば原寸大、原寸以上の迫力で名画の鑑賞ができるわけである。だがそんなことは誰もしないことを誰もが知っている。やはり本物である事が大切なのだろうか。しかし写真だけ撮る姿を見ると、そこに本物がある意味を考えさせられる。

目の前に本物のモナリザがある。本当に本物である。本物を見るためにパリのルーヴルに人が集まる。これは事実である。でなければ長蛇の列に並んだりはいらない。本物のモナリザを楽しむにしていたに違いない。

い。だが、実際に本物を目の前にすると「本物だ。」と言い、写真を撮る。写真を撮ればすぐに次の作品を見に行く。あまりにもあっさりとしすぎているのか。なぜここまできたのだろう。疑問を抱かせられた。

同じような事はコンサート会場でも見る事ができた。アーティストのライブでの演奏の撮影で手一杯。自分で撮ったという事実は確かに残るが、その場で得られる体験としては乏しく思う。雰囲気を楽しむ程度に考えていたならば充分だが、スマホをカバンにしまい自分の目と耳で生で確かめる方がいい。同じ体験は2度と味わう事ができないのだから。

ホンモノってなんだろう。ホンモノについてヴァルター・ベンヤミンは述べている。ホンモノは唯一絶対であり、他に変わりが無いもの事である。やり直しのきかない1回限りの経験が持つ価値のことをいう。ベンヤミンはそれをアウラ（オーラ）と名付けた。もの一つ一つが持つて、なんともいえない何かに名前をつけたわけである。

本物の作品を見るためには本質に近づけるようにいくつかの方法でアプローチをしていく。私の中では作品の鑑賞に3種類ある。「鑑賞者の期待」をベースにした鑑賞方法と「鑑賞者側の知識」をベースにした鑑賞方法と「作品が持つオーラ」をベー

スにした鑑賞方法である。いずれも自分の頭で創り出した物であるが違っている。

「鑑賞者の期待」をベースにした鑑賞方法は、その作品との単純接触頻度、つまりその作品のを見た回数や、口コミの影響が大きい。教科書や、プリントTシャツで作品を見たことと覚えている人、その作品を見たことがあるような気がしている人などがあげられる。凄いという事が頭に何度も刷り込まれ、凄いものがそこにあるんだという期待が作品の価値を上げる。有名な作品ほど出会えた時の衝撃が大きく、その作品がそこにある事だけで満足してしまう事になる。存在への感謝、有り難みは究極の形であると言えるが、そのものに對して好奇心を向ければもう一つ踏み込んだ鑑賞法になる。有名すぎる作品を目にすればそうならざるを得ないのかもしれないが。

「鑑賞者側の知識」をベースにした鑑賞方法はそれまでの鑑賞者の知識と多少の感覚的経験によつて成り立つ。作品ではなく自分の頭が主体である。知識は人により個人差がある。作者の素性を知っている人や、著書を読んだ人それぞれの経験・知識を基盤にして作品を鑑賞する方法である。作品よりも横に書いてある説明を熟読し作品はサラッと見て次の作品を観に行く。この鑑賞方法は歴史的な文脈の中で捉えるのも、その

作者に焦点を当てたものでも複合的に鑑賞しても楽しい。

「作品が持つオーラ」をベースにした鑑賞方法は、一切の先入観（知識）を捨ててただ感じることに徹する。自身の感覚的経験に基づいて、作品から感じるオーラは、自分の等身大であり、作品が語りかけてくるのである。

期待をベースにした鑑賞はその作品を見る事に期待を膨らませればいい。知識をベースにした鑑賞は知識を磨けばよい。それに引き換え、作品のオーラをベースにした鑑賞はその作品にのめり込む力が必要となる。有名な作品をまるで初めて見たかのように反応しなければならぬのだ。フジヤデの能力が必要なのである。フジヤデとは、何度も体験している事を初めてのように新鮮に感じる事である。いつもと同じ道を何気なく歩いているようでも、常に新しい発見はないかアンテナを張っているかどうかでもある。

知識や経験をたくさん積んでくると自分が何でもいろいろ知っていると気がなってしまう。それが驕り（やうり）になって、謙虚に学ぶ姿勢がなくなり、学びをやめてしまう。自分は何でも知っているつもりになって、人のことを勝手に思い込みで判断したり、決めつけをしたりするようになってしまふ。有名な作品を見た時に、分

かった気になってしまふ恐れもあるのだ。知ってしまうと知らないフリをする事が難しいが言わなければ幼児化である。知る前に戻るのである。こういうことは頭で理解できたとしても実行に移す事は難しい。でも近づく事はできる。幸い私の場合、日々介護の仕事で認知症の人たちと時間を共にしていることで気づかせられることが多い。彼らにとっては何度も見たはずのものを、すでに体験したはずのことを、毎回初めて見たり体験する事になる。言葉による意志の疎通が可能なので質問を投げかけると、そこにはたくさんさんの発見があり、観念に囚われずに物事をみるヒントのような物で溢れている。

知ったうえで見るのと知らない状態で見るのでは、衝撃や感動の度合いはどちらが大きいのだろう。知らないで見た時にその凄さに気がつけるだろうか。物質が持つ声にならない声を聞ける力を磨くと、刺激の少なくなった日常を非日常に変えられる。

とはいってもホンモノが何かすら分からないのが本当のところである。何を何のために考えていたのかも分からない始末である。ただ、ホンモノと出逢った時に、ホンモノを味わえる自分ではないとは思っている。

五穀豊穰

〈9頁の花〉 健一郎

花材 稲穂（稲科）
花器 陶花器

（ティム・コプシー作）

フェルトのネズミ

家元が納屋の掃除をしていた時に
出てきた、立花の込藁（こもわら）に残して
あった稲藁の、稲穂の部分を使って
いけた一作。年末でもないのに毎日
のように大掃除を一家でしている。
古いアルバムを見つけたら、先代

先々代の写真なんかを見ていると点
での自分ではなく歴史という線の延
長線上に自分がある事を強く感じ
る。今までにないほどの時間を与え
られ今までにないほど自分と向き合
えている。今後無いであろうこれだ
けの時間に感謝をし、したい事をし
ている。
フェルトのネズミは手先の器用な
知り合いにお願いして、こしらえて
もらった。

小原流 月刊誌「插花」 4月号
〈家元対談〉

小原宏貴さん

+

桑原健一郎

小原流家元の小原宏貴氏は昭和63年に生ま
れ、6歳にして五世家元を継承。日本の伝統文
化である「いけばな」の普及と、芸術家として
国内外の活動に力を注がれている。
桑原専慶流「テキスト」に載る健一郎の文章
を毎号楽しみにして下さっていて、小原流月刊
誌での対談相手に指名していただいた。





2種か3種か

△10頁の花▽ 仙溪

花材 七竈ななかまど（薔薇科）

薔薇（薔薇科）

アネモネ（金鳳花科）

花器 結晶釉鉢（前田保則作）

花展向きの太いナナカマドの枝。最初はバラと2種でいけようと思ったが、どうも物足りない。ナナカマドを小さく使えば2種でも良かったかもしれないが、立派な枝を生かそうとすると、バラだけではつり合わない。悩んだ末に赤い大輪のアネモネを添えることにした。あくまでも脇役としてのアネモネだ。意外と上手く効いてくれた。

横から見た奥行き



太蘭と髭撫子の生花

△11頁の花▽ 健二郎

花型 株分け

花材 太蘭オランダ（蚊帳吊草科）



髭撫子（撫子科）
花器 小判型陶水盤

水物の中で太蘭は手に入れやすい。水物の植物は生け方が特殊な物が多いが、太蘭のお生花は几帳面さを求められるように感じる。得意では無いのだが、穂を一本一本選び、調節するのは楽しい時間である。

横から見た奥行き



集える尊さ

感染症拡大を防ぐために、今しばらくは稽古や花展などで皆さんと集うことができませんが、「テキスト」が少しでも励みになりますように。



「みなさん、コロナウィルスにまけにやいで！」



出逢い花（38） 仙溪

あかばなやくるまそう
赤花矢車草（雪の下科）
べにしだ おしだ
紅羊歯（雄羊歯科）

花器 雲紋竹花籃（貧浦竹自作）
うんもんちくはなかご

深山の谷沿いや林床の湿気のあるところに生えるヤグルマソウ。矢車に似た葉と白い小さな花が集まって咲く。その仲間のアカバナヤグルマソウは中国原産と思われる。ヤグルマソウの英名ロジャースシアで呼ばれることもあるようだ。葉は矢車型ではないが、こちらもしつとりとした森の湿り気を感じる。

この珍しい客人（花だけど）を美しい籠で迎えて庭のシダでもてなす。居心地はいかがですか？

この籠は丹波篠山の雲紋竹で編まれている。竹の表面にあらわれる雲のような模様が生かされて、籠に繊細な品格を与えている。山野草の軽やかさに花籠がよく似合う。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
5 月号
No. 695

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





アリウム・シルバースプリング

△2頁の花▽ 桜子

花材

アリウム・ギガンチウム（百合科）

アリウム・シルバースプリング（百合科）

黄花アイリス（あやめ 菖蒲科）

エメラルド・ウェーブ（ちやせんした 茶筌羊歯科）

花器 ガラス花器

玉ねぎやラッキョウ、ニンニクが仲間のアリウム属の花は種類も多いが、それぞれにとてもきれいな花が咲く。百合科なので小さな八弁の花が球形になり花火の样にも見える。毎年色んなアリウムに出会うが今年はシルバースプリングという中心に赤色が混ざるアリウムを見つけた。

アリウム・ギガンチウムと取り合わせると、畑に咲くネギの花が並ぶ感じ。初夏の青空の下で元気いっぱい咲いてくれるようで力強い。アリウムの葉は畑に残され太陽を浴びて栄養を球根に送る役割をする。代わりにエメラルドウェーブという葉を添えた。



木苺と撫子

△3頁の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 木苺「構苺」(薔薇科)

撫子(撫子科)

花器 陶コンポート(モロッコ)

春に生まれた若葉もだんだんとすっかりしてきた。初夏の爽やかな空気を吸って、植物も人も心地よく伸びをする、そんな季節である。

作例は4月初旬にいったものだが、キイチゴのまだ小さな葉が初々しい。このあと白い五弁花が咲いた。一種では少し物足りないので、白花のナデシコと株分けにした。

庭木がぐんぐんと伸びる季節。初夏の優しい花をつけた木々は、格別ないけばな花材になる。いづれ剪定するのなら、今切って部屋に置いて楽しみたい。そんな時の作例に。

ななめ横から見た奥行





オクロレウカ

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 「三花五葉」

花材 オクロレウカ (菖蒲科)
花器 結晶釉鉢 (前田保則作)

アヤメ科の葉組ものの場合、真胴、留に花を使うのが基本ではあるが、長大アイリスと称されるように、一際大きいこの花の伸びやかさを表現したくて、真、副、胴に花を使った。花を固めたため、留の葉は大きく動きをつけ、控枝の葉は中高にした。オクロレウカは花の茎についている葉の中にも花が隠れている。一本の花で4〜5回も花を咲かす。虫たちに気がついてもらえらる回数、期間を増やすための工夫であろう。花はただでさえ切り落としにくいものだが生花の線を妨げないように隠している。長い間楽しませてもらった。



初夏を盛る

△5頁の花▽ 健一郎

花材 太蘭 (蚊帳吊草科)



紫陽花（紫陽花科）
姫百合（百合科）
花器 陶花器

初夏らしい一作。花の取り合わせによつてはその季節を強く説明するものになる。良い季節が始まる。季節と季節に明確な区切りはなく、曖昧なものだ。そのせいか今日から夏が始まるといつて夏は始まらない。あつという間に一年が過ぎるわけである。最近、季節の花が身によく染みる。



瀬戸内の島で育ったレモンをいただきました。レモン&レモン。



薇と千鳥草

△ 6 頁の花▽ 櫻子

花材 薇(羊歯の若芽)

千鳥草(金鳳花科)

紅羊歯(雄羊歯科)

花器 陶コンポート

春の芽吹いたシダ類と初夏の花を取り合わせる事はめったにしない。季節がちぐはぐになるからだ。きれいであれば何でも良いとは思わない。料理と同じで美味しければ良いとは思っていない。

でも今年の様な気候がこれから先も普通になるのであれば仕方ないかもしれない。一斉に花が咲き揃ったような感じだ。季節の区切りが曖昧になり、違和感を感じながら花も料理も考えなければならぬけれど、今までとは違う新鮮なものも感じていると思う。

若葉の赤茶色が可愛い庭のシダを、園芸種のラークスパー(千鳥草)に添えられるとは思わなかった。

人々の自粛生活が緩んだのと同じように庭の植物達も……。



『座辺師友』

健一郎

「お兄ちゃん僕の事格好よくして」と学校の入学式三日前に相談があった。彼の言う格好いいとは何か分からなかった。ので尋ねるとお兄ちゃんみたくになりたいとの事だった。今年で23才なのだがまだ可愛い弟だ。自分の身なりについて考える良い機会になった。

僕がオススメする服屋さんに行き、靴と腕時計も購入して美容院にも行った。私自身素材へのこだわりは強く、良質なものを身につけたいと思っている。そして身につけるものは、友達以上師匠未満の関係が好みだ。師匠だと身につけるものとしては少し遠い気がする。もちろん値段ではなく質で判断している。「質が分かるのか？」と聞かれると困るが、今までに自分が見てきた物の中で比べている。そして量を見る意識もしている。

自分個人的な持論ではあるのだが、自分を中心に周囲の

環境（人、物等）の平均値が自分なのではないかと考えている。自分が認識したものの中で生きている。そして自分が認識しているモノの影響しか受ける事ができない。自分の意思が明確であればあるほど身を置く環境を選択し、作り出す事ができる。

物から影響を受けようとしても良いものが何か分からないう。まず初めに身の回りの耳障りなもの、目障りなもの、肌触りの悪いもの、美的感覚にそぐわないモノを自分から遠ざけた。次に、全て自分が納得できるモノのみ身の回りに置くことにした。これを繰り返す。考え方が変わると、必要なモノも変わる。

お気に入りのモノと過ごす日々が心地良い。菜月と相談しながらではあるが、合わせることができることが多い。今の自分に必要なモノを自分の周りに置く頭がよく冴える。思考が現実化しているような気がする。頭と実際の場にタイムラグができないようにに気

をつけている。

本を読みその時自分が必要な物を吸収すると、次の人に譲る。また必要になればもう一度同じ本を買う。積読に囲まれて生活している。本棚を見ると好奇心を強く刺激され何から読もうかと悩む時間も楽しい。読み進めていくと捨てられない本が出てくるが、稀である。本棚は少し先の自分を写す鏡のようにも思える。

運動していて上手な人とプレーすると、自分も上手なのではないかと勘違いしてしまう事が度々ある。知識が豊富で論理的に話をする人と会話をすると自分が賢くなった気がする。そしてそういった人に釣られて少しづつ上達する。

こういった僕の考えに近い言葉がある。「座辺師友」端的に分かりやすい。魯山人の言葉である。優れた人、物に囲まれて生活しているとその心をおのずと学びとることができ、自分の周りのすべてが師であり、友であると言う意味だ。

今生きている人の中だけで数多くの師匠を探すことは難しい。言葉を発せぬ先人たちの想い、言葉を話す必要のない植物やモノの声にならぬ声に耳を傾け師とすることができれば多面的に物事を捉えることができ、考え方に厚みがある。言葉を話す師匠から学ぶことは多いが師匠の数が少ない。話さぬ師匠が増えるほど心強い。耳がよく聞ければなるほど多くの事が学びとれる。本人が自覚していなかったものまで学べる可能性すらある。自分が託す側になった時に師匠がいなのは少々不安だ。

自分の限られた時間を誰と何に囲まれて過ごすことが自分にとって大切なのだろう。今私は多くのことを吸収している気がする。直ぐに忘れてしまうが、体のどこかに何かしらの形で残っているだろう。良き物、良き人に囲まれ好きなことばかりしている。日常が尊く愛おしいものになった。

グループホームで利用者さんと過ごす一瞬は同じ時間であつても僕がこれから生きる時間とその方が生きる時間には大きな隔たりがあるように思う。同じ時間ではあるが、終わりが近づく途端に、惜しいものに感じられる。これから僕が100歳まで生きるとなると後75年くらいある。だが30歳までと考えると、1ヶ月後までと考えると1日の密度が変わるのはおかしくないだろうか。平均寿命50歳だった時代に生きていた今100才を超えた利用者さんはどんな気持ちなのだろう。自分が予定していた寿命との隔たりに僕なら戸惑う。

菜月はよく出かける僕を見送ってくれる。わけを尋ねると私が今にもいなくなりそうだからだという。自分でも思うところはあるが、後悔だけは無いよう生活をしたい。良き物、人に囲まれる事は、後悔しないための仕組みづくりとも考えられる。弟に良き物、人が集まることを願っている。



「桜をいける」

△ 8 頁の花 V 5 人合作

コロナ禍でもいけばなを楽しんでもらおうと、春恒例の華道京展を野外ですることになった。

皆さんと競うように同じ場で花をいけるのは本当に久しぶりだった。

桜つくしのいけばな展！

世界遺産の二条城で！

先の植物園もそうだが、文化行政の協力あつてのことと感謝している。

花材 八重桜（薔薇科）

満天星（躑躅科） 数椿（椿科）

花器 彩泥花器「彫風」宮下善爾作

風を感じるように

△ 表紙の花 V 仙溪

花材 菖蒲（菖蒲科）

山躑躅（躑躅科）

花器 朱塗コンボート

いけばなでは、立ち枝、横枝、下がり枝など、もとの姿を想像しながらいけることになるが、下へ下がる枝をいけるのはなかなか難しい。

コデマリのようにいったん立つてから下がる枝はいいのだが、下がり枝のみの場合は枝を撓めないと出来ない。

ヤマツツジの下がり枝の途中に針金をそえて曲げてみた。茶色のフロールテープで仕掛けを隠し、その前にアヤメの葉を立てて目立たなくしている。

手間をかけたおかげで変わった花型ができた。扱いの難しい花材ほど、工夫して生かされると面白い花になる。

山からの清浄な風で邪気を吹き飛ばしてもらるように、疫病退散の願いをこめて、赤い器にいけた。



深山の空気

仙溪

久しぶりに深山の空気を吸ってきた。
30年ぶりの大台ヶ原。晴天のもと、山道を標高1695mの日出がヶ岳をめざす。といつても駐車場からの標高差は120mほど。気持ちのいい山歩き。



大台ヶ原の絶景ポイント、大蛇ヶ（だいじゃが）。深い谷底の向こうに山並みが迫る、神聖な空気を感じる場所だ。このあたりにはコウヤマキ、ゴヨウマツ、ツクシシャクナゲが見られる。（奈良県吉野郡）



ミヤコザサに覆われた山肌に立ち枯れた木や倒木が白く残る。屋久島にならぶほどの多雨地帯なのに、森が消えていた。正木峠付近。



途中、ツツジのトンネルを抜けていく。またいつか、花の季節に訪れたい。（4月21日撮影）



1963年撮影の正木峠。（説明板より）昔は苔むす森だった。現在、森林再生の試みがはじめられている。

回り一面ミヤコザサの中を歩く。このササが地面を覆ってしまおうと、他の樹木の発芽ができなくなってしまうのだが、昔、台風による倒木を搬出したことがきっかけで、林床が乾燥し、コケ類が大幅に減少してササの天下となってしまうたそう。更にササを求めて鹿が増え、樹皮

が食べられて森の消失が加速する。それでもツツジの仲間は頑張っていた。シロヤシオ、アケボノツツジ、ツクシシャクナゲ、サラサドウダン、コアブラツツジ、トサノミツバツツジ、ヒカゲツツジ、等々。花が咲いたらさぞ素晴らしい景色が見られるに違いないが、4月下旬なのに山は

まだ晩冬の様相。花の季節には是非また来たい。
過酷な山道を車で走って大峰山の修験者が泊まるという洞川温泉で1泊。湧水ゴロゴロ水をいただいて、龍泉寺、天河大弁財天に参詣し、家族の健康と花技上達を祈願して帰路についた。

丹生都比売神社

花盛祭（はなもりさい） 仙溪

ぶらりと一人旅。

花盛祭という名前に惹かれて、高野山の入口にある丹生都比売神社を参拝してきた。（JR笠田駅からバスで30分）

弘法大師空海が高野山に金剛峯寺を建立するにあたって、丹生都比売神社が神領を寄進したと伝えられ、高野山と深い関係にある神社である。

花盛祭はご祭神に花を供え春の訪れを

寿ぐ祭り、季節の花が参道を飾り、神前への供物にも花が添えられる。祝詞奏上、子供達による神楽舞、参拝者の玉串奉奠がおごそかに行われた。

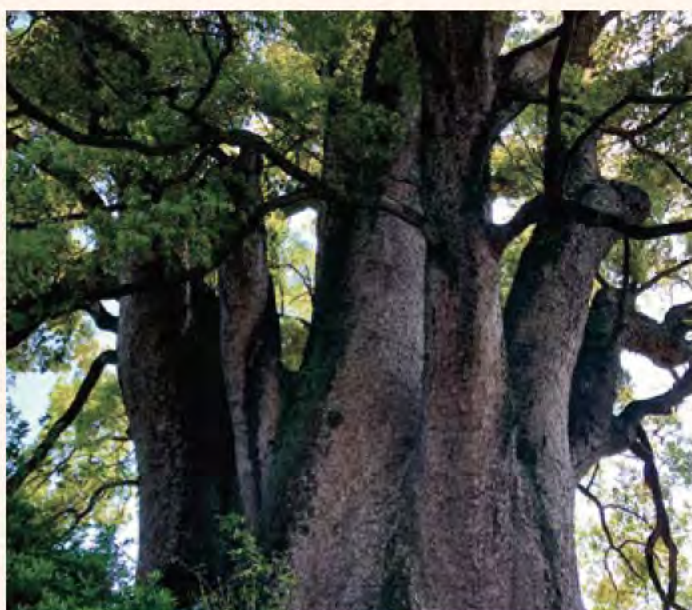
この地は「紀伊山地の霊場と参詣道」の一つとして世界遺産に登録されている。その理由の一つに「神仏習合」がある。お山への信仰心と仏教とが融和した場所。水の神、山の神に感謝し、花を供える。仏前の供花も同じ心で行われていたのだろう。今も昔も、花が人の気持ちの橋渡しをしてきている。



清々しい青竹に季節の花が。高野山で空海が催した万華会と関係があるのかも。



⑤花を浮かべた石の花瓶。拝殿両脇にあり、古代インドの満瓶を思わせる。



樹齢600年以上、近畿最大の巨樹「十五社の柿」。笠田駅から徒歩5分。かつて十五社明神が鎮座する妙楽寺の境内だったが、今は柿の下に小さなお堂一つ。



子供神楽の奉納。平安を願う浦安の舞だ。雅楽に鈴の音が重なる。桜の挿頭（かざし）に春を感じる。



和歌山県伊都郡かつらぎ町のJR笠田駅で下車。柿、梅、桃、梨、りんご、ぶどう、みかん等の畑が点在する。



アメリカの思い出

△12頁の花▽ 仙溪

花材

アメリカ手鞠下野（薔薇科）
石楠花（躑躅科）

花器

花崗岩花器

仙齋・素子の写真集『花ふたり旅』にも使われている石の器。花崗岩を丸く削り、穴が彫られている。かなり重たいのだが、冬のワシントンで購入して撮影に使い、その後私がリュックに入れて家まで持って帰ってきた。

『花ふたり旅』ヨーロッパ撮影では、飛行機トラブルで予期せずシカゴ近郊で1泊したが、宿の前にシャクナゲが美しく咲いていたのをよく覚えている。6月初旬のことである。そしてこの作例。花屋でアメリカテマリシモツケ（オウゴンコデマリ）の面白い枝とシャクナゲを見つけた瞬間、自分の中の「アメリカ」が一つの形になった。シャクナゲの名前に石の字が入っていることも、きつと作用しているに違いない。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
5 月号
No. 707

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





白い花 菖蒲

△表紙の花▽ 仙溪

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

花水木 (水木科)

花器 陶花器 (清水卯一作)

紫色の印象が強いからだろうか、白いハナシヨウブには特別感がある。

ハナシヨウブは野生のノハナシヨウブの園芸種だが、ノハナシヨウブは赤紫から青紫が多く、白花は極めて珍しいそうだ。森の中で水辺に白い花が咲いていたら、さぞ神秘的な光景だろう。いつか出逢ってみたい。

ハナミズキは北アメリカ原産でアメリカを代表する花木だ。明治時代に日本からソメイヨシノが送られ、その返礼に日本へ

やってきた。近年街中に多く植えられるようになり、桜の散った後も目を楽しませてくれる。好みの壺で、花の出逢いを楽しんだ。



ブラサダという蘭

△2頁の花▽ 櫻子

花材 クロトン2種 (燈台草科)

ブラサダ・オレンジ・デライト (蘭科)

花器 金属装飾陶皿 (モロッコ)

長くて尖った花が珍しい蘭の「オレンジ・デライト」見惚れて暫くは食卓に飾った後、クロトンと一緒にいけてみた。

クロトンもカラフルできれいなものが多く、細葉や赤い葉脈がくつきりと目立ち、リュウノヒゲとかコブラと呼ばれる様な品種もあるくらい多様な形と柄がある。

どちらも長く日持ちしてくれただが、枯れていく姿も美しく、器を変えながらこの組み合わせを楽しんだ。

横から見た花の奥行





芍薬と太藺

△3頁の花▽ 健一郎

花材 太藺（蚊帳吊草科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 ガラス花瓶

芍薬は咲いても綺麗だが、咲く直前に強い生命力を感じる。この芍薬に合うほどの数の太藺は料理の専門学校生が授業後、置いて帰ったお花である。芍薬と二種で生ける事になるとは思ってもみなかった。芍薬に負けない強さが出た。太藺の線の美を引き出すのはやはり難しい。投げ入れにすると水に浮くので剣山に生けている。

横から見た花の奥行





赤いスカビオサ

△4頁の花▽ 仙溪

花材 スカビオサ (忍冬科)
宿根スイートピー (豆

科)

夕霧草 (桔梗科)

花器 陶花器 (福本双紅作)

スカビオサは南ヨーロッパ、
アフリカ、アジア原産で、日本
のマツムシソウの仲間だ。マツ
ムシソウは薄紫色の花が咲く日
本の野草で山地の草原に育つ。
花の後にできる球状の膨らみ
が、僧侶が巡礼の時に持つ松虫
鉦に似ているところからこの名
がついたそうだ。

濃い赤色のスカビオサに白い
宿根スイートピーがよく似合
う。緑のユウギリソウは草原の
代わり。紫の宿根スイートピー
をアクセントに。

横から見た花の奥行





パイナップルの仲間

△5頁の花▽ 桜子

花材 オクロレウカ(菖蒲科)

黄花グロリオサ(百合科)

ネオレゲリア(パイ

ナップル科)

花器 ガラス鉢

オクロレウカとグロリオサだけでは平凡なのでパイナップルの仲間であるネオレゲリアを足元に添えた。黄色のグロリオサと一緒に飛び跳ねる様なかたちが可愛らしい。赤く染まっている部分も全て葉だが、まるで花の様にみえる。

熱帯アメリカ原産のネオレゲリアは手に入れてから2ヶ月にもなるが、部屋にいていても鮮やかで艶もあり生きているのがよくわかる。

木の上や岩盤などにくっついて生活する着生植物なので、根は退化していて水を吸い上げない。水は葉の中心部に霧吹きして鑑賞している。





立派な円錐形

△6頁の花▽ 仙溪

花材 柏葉紫陽花(紫陽花科)
芍薬(牡丹科)

花器 陶花器

カシワバアジサイは北アメリカ原産。花が円錐状につく。鉢で育てているが毎年花を咲かせる逞しい花だ。赤いシャクヤクと黒い器にシンプルに。



レモンはオンライン講習に参加。メイは庭の探検中。





躑躅の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花型 草型 副流し

花材 霧島躑躅（躑躅科）

花器 白竹竹筒

無性にお生花をしたくなる時がある。僕の場合は大抵、美味しいお酒を飲んだ後である。お昼に外で食事をした帰りに、生花の得意な師範の方と御所の前で偶然出会った。二人で御所の中を歩き楽しみ、その足で花を求め、自宅へ。お互い納得がいくまで自分の躑躅と向き合った。お互いがそれぞれに大切にしている事、が手に取るようにわかる。共に花を生ける友を得た良い1日であった。

横から見た花の奥行





足を伸ばして高千穂峡（宮崎県）へ。

肥後で生まれた6つの花
椿、芍薬、花菖蒲、
朝顔、菊、山茶花。
（水前寺公園にあった説明板）



日本いけばな芸術九州展
熊本鶴屋百貨店
4月13日（水）～18日（日）
桑原仙溪
石楠花 松 桜苔木
器…水の平焼
龍が持つ玉のような器は
熊本の水の平焼で、熊本
の伝統工芸とのコラボと

して、京都から花と敷
板を持参していた。
熊本地震から6年が
経つ。崩れたお城も天
守閣は昨年から見学を
再開。花展にも多くの
来場があった。歴史の
誇りや文化の力が人の
心の支えになっている。



京都東山花灯路 2022 後期展 3月9日～13日 法観寺前
桑原仙溪 花：連翹 器：陶花器（竹内眞三郎）



京都東山花灯路 現代いけばな展
3月9日～13日 円山公園
桑原健一郎 3瓶飾り
木瓜、黄梅、椿
器：竹内眞三郎



京都新世代 野外いけばな展
～私の印象～
2月11日～13日 堂本印象美術館庭園
桑原健一郎 二株立花
満作、小手毬、木瓜、牡丹、椿、
枯向日葵の茎、枯物花材
器：市川博一

第73回 華道京展 ～花と遊ぶ～

会期 4月7日(木)～12日(火)

会場 大丸ミュージアム(東京都)

コロナウィルス感染拡大の影響により2年前には中止、昨年は

二条城の野外展示に切り替えたので、大丸での開催は3年振りとなった。各期最終日は3時閉場にしたが、6日間で7千人を超える来場があった。

いけこみ時のリスクを減らした

めに前期と後期で出品流派を変えたり、いけこみを2部制にしたりと、今までと違うこともかえって新鮮で、工夫しながら前へ進むことの大切さを改めて感じている。



蘭の立花 バンダ、オンシジウム、サンセベリアほか 器：瓷器 木村展之
藤、板屋名月、躑躅 器：陶花器 竹内眞三郎



エピデンドラム、ビバーナム、葉桜 器：ギヤマン・ガラス鉢
桜の生花 器：方形陶花器 富永脩



駅 de 華道、書道と茶道 3/12・13 京都駅前広場 展示 桑原仙溪ほか 体験イベントは中止

『使い回わしの読書感想文』

健一郎

中学の恩師が流展にいらした。「私はこの先生には特別に目をかけてもらっていた。」と皆が思うような先生で今も活躍なさっている。何かあれば土曜日であろうと日曜日であろうと指導を熱心にしてくれる先生だった。ダメなことはダメ。生徒同士の噂にも敏感で何かあれば自分のことのように祝福してくれる。体が弱いのに、人一倍動き、気も常に使っている。身を粉にして働いているようにも見えるのだが、全くそれを感じさせないのだ。心理的にも、物理的にも人の痛み、喜びを受け入れ、導く人であった。

先生は一人一人を見て生かすことが得意だったように思う。一人一人を特別に見ていた。生徒の特技を引き出す場を設けるのが上手だった。カナダの留学生の前で日本の文化の紹介をするというところで和室で裏白の木のお生花をいける大きな場をいただいた。デモンストレーションを経験させてもらった14才の夏だった。枝を撓める度にでた嫌な汗を鮮明に覚えている。先生は特別な場を作ることとしたが、日常的に人を生かしていたのだから驚きだ。

流展の会場でお互いの安否の

確認が終わると、先生からすぐに、このテキストの文章を褒めていただいた。「君に文章の才能があったとは知らなかったわ。」とのことである。国語の先生に褒められたのではなく存在を褒めていただいたような言葉に感じた。元来文章を書くことが大の苦手であった。言いにくい事がなかったということだろうか。夏休みの読書感想文は、中学一年生の時に祖父に書いてもらった。毎日読書感想文を書いたような人である。原稿用紙を奪われる形で本人は楽しそうに書いていた。その後、中学一年生に書いてもらった感想文を高校の卒業まで書き写し提出していた。6年間自分のしたいことに時間をつかえた有意義な夏休みを過ごしていた。

中高時代に自分で書いた文章と言え、その場で恩師の先生に言われ書かされた反省文ぐらゐのことである。学生時代は運動と遊びが一番で勉強に割く時間なんてものはなかった。自分でも驚くが、今は読みただけの本を読み、毎日のように貯めたい言葉に出会い、保存して、このテキストの場で好きなことを言っている。毎月言いたいことが溢れ出てくるのだから不思議だ。今も変わらず、したくないことは適当に誤魔化しながらしたい事ができる環境を作っている。わがままなだけである。言い換えると生き生きとしているのだらう。

読書感想文を使い回していいことを先生に告げた。「全く気づかへなかったわ。それも一つの才能やね。」とおっしゃった。

いけばなにおいても型とはよくできたもので、型通りにいければ綺麗に見える。型通りに入っているのに植物が魅力的に見える花は植物の魅力でなく型に心を奪われていることが大半だ。世の中のほとんどのいけばながそうであると思っている。魅力が見えない人に魅力の引き出し方を伝えられるはずがない。ある師範のお弟子さんが言っていた。「先生、お生花の型に当てはめる事ができたら、見た事もないような植物でもいける事ができるのでしょうか？」僕は、型から入るいけばなは植物の魅力を最大限に引き出すことはできないだろうと答えた。ただ書き写しただけの軽い読書感想文が頭に浮かんでいった。「先生は真面目で誠実ですね」と返事が返ってきたが、いけばなはかつての読書感想文ではない。

理屈さえ把握すればどんな花でも生ける事ができる。これは、型の使い回しである。本当に好きだったのならば、その植物ごとの個性性を大事にし、引き出すところだろう。自分のお弟子さんにそんな事を教え始めて4年ほどたった。型はまだ教えて

ていない。彼、彼女らは魅力を引き出そうと懸命だ。セオリー通りではない、驚くような方法で植物を魅せてくれる。最近ではお稽古をしていて私が楽しまされているような気がしている。

型に当てはめて、要領よく書かれては困る。使い回しの読書感想文があると知った僕は、それを見つけた時に指導することができるだろうか。想いの込められた物とそうで無いものを見分けるのは両方経験したからである。

型に当てはめるだけのものは戦前、戦後に爆発的ないけばなの拡大が見られた時代には適していた。簡単にお花を生けられるようになり、お免状が求められるようになっていたからである。今、僕が人に伝えたいのは、花と向き合う楽しさ、花の魅力の引き出し方である。使いまわされた読書感想文ではない。今のところ僕のお弟子さんは何文字ぐらいいだろうか。相当な文量を熱心に教場で書いている。

生花と立花の古典に関しては花の魅力を十分に引き出せるようになってから型を習うのがその人の花をいけるための道だとい今は考えている。

料理の専門学校で副家元がいけばなの授業を担当している。いけばなの授業を楽しみにして

くれている人もあるが、なぜ料理以外の事をしなければいけないのだろう、と疑問を持つ人もあるようである。初回の授業で花に触れる前に持ち帰るよう伝え、家に飾る場所がない、家まで遠いなど理由を探す。花に触れた後の表情は変わり、授業後、家の玄関に一輪だけ飾りたいです。トイレは可愛そうですかね？家までお花を持たせる方法は何かありますか？と質問攻めである。授業を重ねる度にそんな人が増えるのが楽しみだ。

お弟子さん、生徒さんのあるがままの状態を受け入れ、そこから一人一人がそれぞれしたいことができるためのお手伝いをする。それは子供のいけばなでも、グループホームでのケアでもあっても、変わらない一つの僕の背骨である。

多忙であろうに、疲労感を隠しながら先生は、最高の作り笑いをしてくれた。5分ほどしか話してないかつたはずだが、その5分はゆつたりとした時間でアルバムを見ているようだった。来て下さった事に対する感謝と、このタイミングで会えた事が今の自分を見つめ直すきっかけになりました。これからしたい事を好き放題にやっていきます。ご来場くださりありがとうございます。お元気で。

草花

花伝書を見る

立花 芦除真

「草花」僧光清（富春軒・初版）

芦 薄 百合 芍薬 杜若 小菊

熊笹 紫苑 著我

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



草花主体の立花である。葉を広げ茎を伸ばし花を咲かせる草花たち。自然の息吹を見つめる眼差しを感じる。

花をいけるのは、和歌や俳句や詩に自然の輝きを詠みこむのに似

ている。肝心なのは輝きを感じる心。富春軒のいける花はどの花もキラキラ輝いている。

仙溪

僧光清



楓

△12頁の花▽ 健一郎

花材 花菖蒲（はなしょうぶ 菖蒲科）
いろは紅葉（いろはもみぢ 楓科）

花器 陶花器

桜の季節に少し遅れて楓の花が満開になる。楓の花が集める大量の虫は春の終わりの知らせだと思っている。楓の下に僕もよく行く。だが、あまりの虫の多さに退いてしまう。花の盛りが終わってやつと私が楓を味わう番である。花菖蒲の季節にもなると花は終わり写真のようになってしまう。そりかえった枝なので葉を前面に見せて生けた。どつしりとした器に花菖蒲とよく似合っている。私の大好きな季節である。

横から見た花の奥行



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
5 月号
No. 719

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





たいせつに扱って

△2頁の花▽ 櫻子

山吹（薔薇科）
芍薬（牡丹科）

都忘れ（菊科）

陶花器（清水保孝作）

山吹と芍薬、この二種を満開に咲いているタイミングでいける事は中々無いと思う。

今年の春は暖かい日も多くて、いつもは固い蕾の芍薬がふつくと手まりの様な姿を見せてくれた。

燃料や光熱費の値上がりで、去年の冬は木や草花が中々育たなくて出荷出来ないという聞いていただけに、桃や桜がいつもの時期にいつもの様な姿で出て来てくれた事は本当に有り難かった。

大切に扱っていききたいと感じている。





鉄線を子株に

△3頁の花▽ 仙溪

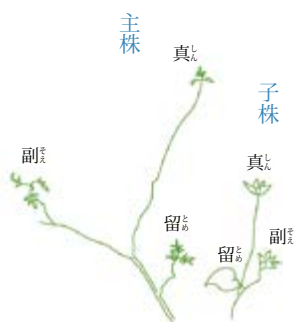
七竈ななかまど（薔薇科）

鉄線2種（金鳳花科）

陶水盤

真と副のナナカマドは1本の枝で、もともとの形をそのまま生かしている。真の曲がりが高く感じたが、後から加えた枝が違和感を和らげてくれた。

残った枝を子株のテッセンの支えにしたが、居心地が良いのか、思いのほかテッセンが長く咲いてくれた。





旬の温かさ

△ 4 頁の花▽ 健一郎

うりはただかえで

瓜膚楓 (楓科)

のかんぞう

野萱草 (百合科)

なるこゆり

鳴子百合 (百合科)

結晶釉水盤 (前田保則作)

街中では見かけないが、里山にはいくらかでも生えているのを見る。地元の人からすると大した喜びではないかもしれないが、街では見かけない。そして、お花屋さんで見かけるとつい、求めたくなる、野萱草。自然の池の側には瓜膚楓は実になっていた。水を感じたく水盤で生けた。感じていた情景がバック紙でよく表されている。斑が強く入った鳴子百合がまとめてくれている。それぞれが競い合うことなくそれぞれの良さを発揮していて気持ちよさそうだ。



花伝書を見る

二株砂物 太蘭真
富春軒

若による水辺の景色を見せる。
山に分け入り、太蘭の生える
神秘的な沼にたどり着いた、

太蘭 ふとい しやくやく 芍薬 松 晒木
杜若 かきつばた 小菊 ひまわりぎ 檜扇 わかば 嫩葉
(立花時勢粧・中 雑体の図)

富春軒が目指した「自由」
がここにも現れている。真っ
直ぐ育つ太蘭が曲がりつつ放
つ生命力に心打たれたのだろ
う。数本の太蘭なのだが、松
の株や晒木と対等にいやそれ
以上の存在感がある。

それぞれの配置の絶妙なこ
と。松の切株や晒木を近景に
して、その向こうに太蘭と杜

そんな想像をしながら眺めて
いる。

砂の物は株立とも呼ばれる
ように基本的に太い株が景色
に加わる。立花とはまた別の
表現ができるし、そこを目指
さねばならない。



富春軒



テマリシモツケ

△表紙の花▽ 仙溪

アメリカ手毬下野(薔薇科)

銅薄端

アメリカテマリシモツケは北アメリカ原産の落葉低木。コデマリに似た花を咲かせたあと、手毬状に結実する。



実は袋状で赤茶色に色づき、裂けて口をあけると花のように見える。このような実を袋果と呼ぶが、ユキヤナギやコデマリも似たような実ができるので、河原や公園で探してみよう。

アメリカテマリシモツケの切り枝が売られていたので、太枝からの分かれ枝を生かして生花でいけてみたが、実なのでかなり長く楽しめた。北アメリカの自然を堪能できる花材である。

京都いけばなプレゼン

ーション2023

いけばなの日(6月6日) 協賛事業

「いけばなみつけた」

6月3日(土)～4日(日)

京都芸術センター

出品 桑原健一郎

石黒慶知 クリス慶久

宇治市民いけばな展

会期 5月20日(土)～21日(日)

会場 宇治市植物公園

第10回 合同茶会いけばな展

2月11日(土)～12日(日)

吉野川市文化研修センター

26人出品

徳島代表いけばな展

4月15日(土)～16日(日)

あわぎんホール

2人出品

第74回 華道京展

前期 4月6日(木)～8日(土)

会場 大丸ミュージアム京都

出品作 (写真①②③)



華道京展

桑原仙溪

(写真①)

生花

葉団扇楓

器：阪野鳳洋

②



華道京展 桑原健一郎・小田部慶綾 立花／藤 松 松晒木 ^{つつし}躑躅 ^{しやが}貝塚伊吹 著我 器：矢野款一

③



華道京展 山本慶紀・稗田慶智・掛水慶恵 ^{びかくしだ}麋角羊齒 (葉・枯葉) アンスリウム 器：ザールバーグ



日本いけばな芸術中国展
晴れの国この春は花の国

会期 4月12日(水)～17日(月)

会場 岡山高島屋

出品 18名(写真④～⑱)

桑原仙溪 (写真④)

生花 木瓜 裏白の木

器 石田和也

(備前陶心会)

岡山で15年ぶりとなる日本いけばな芸術中国展が開催された。桑原専慶流の先生方は、出品に加えて花展実行委員として様々にお仕事を担当されて、お蔭様で素晴らしい花展となった。

当流の出品作はどの花も花が主役で、花器との調和も見応えがあった。奇をてらって独りよがりになったり、技巧ばかりに目がいくのではなく、まず花の輝きを皆さんに楽しんでもらいたい、そんないけばなだったことが何より嬉しい。

私は地元陶芸家とのコラボで初めての器にいたが、持参した花材が気持ちよさそうに花を咲かせてくれたのでほっとしている。枝物2種の生花だが、父・仙齋が好きだった組みあわせ。この絶妙な関係は生花だからこそ生まれる。



小野樹仙 立花「二つ真」

松 伊吹 藤 伽羅木 躑躅 空木3種 海老根蘭
ニオイイリス 紫蘭 小菊



上野淳泉 立花／松 蘭



小原淡翠 立花

アンズリウム オクロレウカ アレカ椰子
グロリオサ エピデンドラム ドラセナ ヒペリカム



小津野雅翠 立花

躑躅 小手毬 ガマズミ 花菖蒲 芍薬
著莪 夏櫨 伽羅木 斑入柃木



⑨

吉田房水 赤木雅芳 宇野民水 八重桜 どうだんつつじ 燈台躑躅 鉄線2色



⑩

小野京苑 石井清月 尾崎洋風 旅人の木 オーガスタ 百合 グロリオサ 五葉松



⑫

三近碧風 夏櫨 躑躅 杜若 海芋



⑪

宮本京泉 びかくした 麋角羊歯2種 グロリオサ



⑮

中田利華 グロリオサ
プロテア モンステラ



⑭

友延美泉 カトレア3種
ミリオクラダス シンピジウム (葉)



⑬

原映泉 花菖蒲 石楠花 鉄線 他



⑰

石井慶月 パフィオペデルム
アンスリウム ミリオクラダス



⑯

岡部華秋 プレクナム・シルバーレディ
アンスリウム ジャンゲルブッシュ



旬の強さ

△5頁の花▽ 健一郎

やまぼうし みぎき
山法師（水木科）

かわらぬでしこ
河原撫子3色（撫子科）

陶花器（宮下善爾作）

河原撫子の三色と山法師、器も含めて日本で生まれたものである。取り合わせたとき、生けている時は特に気がつかず考えてはいなかった。撫子の旬の季節になると赤色の撫子がお花屋さんに並ぶ。伊勢菊と同じように花びらを垂らしたように咲く伊勢撫子なんかも出てくる。華奢で綺麗な撫子が力一杯、山法師に負けまいと咲いている。好きな取り合わせに、撫子と花菖蒲がある。そうすると撫子が可愛らしく映る。写真は山法師と取り合わせたため競い合っているように見える。旬でなければ山法師に撫子が負けていただろう。器は撫子を応援しているに違いない。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2024 年
5 月号
No. 731

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





プロペラのような

△2頁の花▽ 仙溪

棕櫚竹 (椰子科)

紫陽花 (紫陽花科)

セルリア (ヤマモガシ科)

ガラス花瓶

隣家との境にシュロチクを植えてあり、ときどき切っていている。タケでは無くてヤシの仲間。今回もアジサイとセルリアだけでは平凡だと困っていたところを救ってくれた。若い株の梢の部分で、葉がプロペラのように見える。花の重みを軽やかに柔らげてくれた。



ラナンキュラス

・ラックス

△3頁の花▽ 櫻子

ラナンキュラス・ラックス

(金鳳花科)



ビバーナム (忍冬科)
すいかずら

ユーカリ (フトモモ科)

陶製ピッチャー

3週間程前に撮影したラナンキュラス・ラックスを側に飾りながら、この原稿を書いている。今だにパールの様なキラキラした花びらで私を見てくれて、うっとりする。

ラナンキュラスはいつも新しい品種に出会う時、驚きと誘惑でその花の前から立ち去る事が出来なくなるくらい魅力がある。

このラナンキュラス・ラックスも宮崎の園芸家によって作出された品種でどれくらい長い年数をかけて育種されてこられたのだろうと思う。

長くいけても最後まで小さなつぼみも咲いてくれて、その力強さにも感動してしまう。

ラナンキュラス+ワックスIIラックスと言う名前も覚えやすくて、親しみやすい。





2種のツツジで

仙溪

霧島躑躅（躑躅科）
きりしまつづじ

蓮華躑躅（躑躅科）
れんげつづじ

貝母（百合科）
はいも

陶花瓶

3年前、大台ヶ原に行ったのは4月下旬、少し早すぎてお目にかかれなかったが、様々なツツジが咲くらしい。ツツジの多くは岩場や崖地の土壌がやせて酸性の強い、日当たりの良いところを好むそう。そういう場所へ行くにはかなりの登山を覚悟しなければならぬが、それだけの価値はある。

そんな事を思っていたら、2種のツツジと一緒にいけてみたくなった。赤いキリシマツツジは馴染みの花材。レンゲツツジは少し特別。バイモ（別名・アミガサユリ）を合わせて、家に居ながら季節の自然を。





裏白の木 鉄線

仙溪

裏白の木（薔薇科）
鉄線（金鳳花科）

白竹竹筒

ウラジロノキの若葉は緑白色で清々しい。これは葉の両面に白毛が密に生えているためだが、表側の毛はやがて取れてしまい裏側の毛だけ残るので裏白となる。

花展向きの太枝を1本買い求めて生花にいけ、テッセンを覗かせて季節の彩りを加えた。



稽古の花 ⑦ 仙溪

3月26日撮影

薔薇(薔薇科)

茴香(芹科)

玉羊歯(蔓羊歯科)

陶花瓶

良いバラ1本とそれに合う花材の取り合わせです。いけるのが簡単なようで意外と難しく、バラの葉を大切に扱って活かすことが求められます。

花も葉も生き生きとしたバラは、葉に霧を吹き水切りして花瓶に挿すと、それだけでも充分美しいということを、まず実感してもらいたいですね。

ウイキョウはレースのような花が軽やかに広がって、バラを優しく包んでくれます。タマシダの明るい緑色で、爽やかな茂みを加えました。



【訂正】 テキスト730号 5頁
玉羊歯(蔓羊歯科) ↓ 蔓羊歯科)

いけ替えて

△表紙の花▽ 櫻子

ヘリコニア2種(芭蕉科)

ギガンチウム(百合科)

不喰芋の葉(里芋科)

陶花瓶(加藤敏雄作)

春にいったヘリコニアは枯れても面白くて不思議なカタチで中々捨てる事が出来ない。

新しいヘリコニアを1本足し、ギガンチウム、斑入りのきれいなサトイモ科の葉をプラスして器も換えていけてみた。



第75回 華道京展 ときめく気持ち 花めく心 ～これからも、ずっと～

会期 4月4日(木)～9日(火)

会場 大丸ミュージアム京都

大丸京都店6階



内田慶雅 も だまづる 藻玉蔓 シンビジウム
コチョウラン ミリオクラダス 器：森野泰明



桑原健一郎 藤の生花 ふじ しやれぼく 藤 晒木 器：宇野仁松



荒田慶優 勝谷慶朋 林慶真 もくれん 木蓮 カラー つばき 椿 器：近藤豊

右同

花伝書を見る

立花 松除真のきしん

「(行の) 行の花の内中流枝立」
ぎよう なかなかしだて

寺田八郎兵衛

松 枇杷びわ 百合あじさい 紫陽花ひょうたん

栢つげ 要かなめ 小菊ひらぎ 檜扇(葉)

(立花時勢粧・上)



流麗な枝の動きが印象に残る。左に下がる真の松と右に上る請の枇杷の対比に、左に出た副の枇杷の大きな葉が絶妙なバランスに納まる。流枝が請のすぐ下から出ることで、花形の軽妙さを際立たせている。紫陽花の胴も爽やかだ。

立花時勢粧・上巻には真行草の花形と、それぞれにまた真行草があつてその作例が載る。富春軒が選抜したのであろう秀作が揃っている。

寺田八郎兵衛

中国の挿花 ⑥

仙溪

「天中佳景」と題された絵には、端午節（天中節）に、ゆかりの植物を花瓶にさしたり器に盛って飾る風習が描かれている。いま摘んできたばかりのようなヨモギとシヨウブの葉が置かれ、挿花からは小さなトラやチマキの飾りが吊されている。絵の上部には護符が5枚描かれ（貼られ）ている。

花瓶に挿されている赤い花はザク口。ピンクと白の花はタチアオイか。ガマが1本。盛り物は2種類の粽と団子にザクロ、ライチ（レイシ）、クワ、ヤマモモ等の実。他にもシロクワイ、サクランボも飾られている。

絵の中の植物も飾りも護符も、どれもが悪い物を遠ざけるためのものだ。日本でも5月5日の端午の節句にヨモギとシヨウブを軒に吊したり風呂に入れたりするが、それらには香りで邪気を払い、薬効で身体を強くする願いがこめられている。

中国では端午節に蛇・蜥蜴（又は蜘蛛）・蠍・蜈蚣・蝦蟇の「五毒」とされる害虫が湧き出るので、霊草（葉草）の力でそれらの侵入を防ぐ風習があった。霊草は刻んで袋に入れたり（統命縷）、人型にして門口に掛けられた。ザクロの枝に虎が吊されているのも「端午の虎」が五毒を踏みつけると信じられていたことによる。可愛い飾りにはこどもの健康を願う思いも込められていたに違いない。

中国では端午節に蛇・蜥蜴（又は蜘蛛）・蠍・蜈蚣・蝦蟇の「五毒」とされる害虫が湧き出るので、霊草（葉草）の力でそれらの侵入を防ぐ風習があった。霊草は刻んで袋に入れたり（統命縷）、人型にして門口に掛けられた。ザクロの枝に虎が吊されているのも「端午の虎」が五毒を踏みつけると信じられていたことによる。可愛い飾りにはこどもの健康を願う思いも込められていたに違いない。

護符の4枚は道教の呪符（霊符）で魔除けの意味があるのだらう。中央の鍾馗像は日本でもよく見かけるが、はじめは玄宗皇帝が鍾馗と名乗る者が小鬼を退治する夢を見て熱病

が治ったことによる。以来、絵に描いた鍾馗像は年末の魔除けとなった。いつしか福をもたらす蝙蝠と共に描かれて端午節の護符になったらしい。

中国の挿花は宮廷や寺院、道観料亭、文人の書齋などによって、又時代によって様々なのだらう。牡丹のみに友のように挿したものや、薬を1本花瓶に挿しただけのもの、春節に吉祥の組み合わせを挿したものや、今回のように邪を払う願いを花に託したものもある。絵に残された多様な挿花をたどる旅は、古の中国を知る旅でもある。



「天中佳景」元代 作者不詳
台湾国立故宫博物院所蔵。

出典：台湾国立故宫博物院アーカイブサイト <https://digitalarchive.npm.gov.tw>

魔除けの鍾馗像が年末から端午に変わるの明代中頃だそう。元代に描かれ、明代に護符が貼られたか？。邪を払うとされる石榴、菖蒲、蓬、蒜、龍船花（サンタンカの中国名）は「五瑞花草」と呼ばれた。



繊細に作られた魔除けの飾り。トラ、チマキ、シヨクメイルなどが吊り下がる。



鍾馗とコウモリは魔除けと招福のための図像。



いけばな
ワークショップ



3月中旬、イケバナインターナショナル・ジュネーヴ支部からのお招きで、菜月と小田部慶綾さんと共にスイスを訪れた。

人と植物は北に行けば行くほど大きくなるのではないかと、現地でお世話になった方から伺った。お花が大きく育つという。日本の花は小さくて上品だと羨ましがられたが、花の勢いに差はあまり感じなかった。どちらも土地に合った旬のお花が綺麗だ。ジュネーヴの植物たちの勢いと、日本で普段触れる気候や植物達の差を楽しんだ。例えば、お庭で見つけたアガパンサスは乾燥している地域だからその綺麗な枯れ方で、日本でこんなに綺麗に枯れているアガパンサスをみたことがない。その日には乾燥で唇も切れたがアガパンサスの事を思えば喜んで受け

入れるしかない。気候に合っているのか、日本と比べても特に勢いがあつたのが連翹と木瓜だ。共に庭や生垣によく植えられており、現地では春を知らせる花だという。

驚いたのがお庭で花を見ている際、他のどこでも聞いたことがないほどの鳥の種類と数の鳴き声が日本の夏の蝉といひ勝負をしそうだった事だ。鳥の鳴き声のする庭の中で植物を見ていたり昼食を頂けた時間は、生け花として現れていると思っている。どう過ごすか、どう在るか。何を感じ、どこでどのような影響を受けるかが花や文字に現れる。僕はデモンストレーションまでの少ない時間をできるだけジュネーブを身体で感じ取ることに注力した。それは飛行機が着陸する前に高度を下げ山の景色が見えてからである。

ジュネーヴの春

健一郎



イケバナインターナショナル 役員の皆さんと



花市場にて



「花ふたり旅」撮影地
シオン城をバックに
島田ご夫妻と



今回、一番自分の中で成長したと感じたのが、人に任せるということだ。人が確かな技術を持っていたとしてもそれは自信のなさ一つで難しいものになる。自分でさえ、感じた事を100%表し切ることは難しい。それは言葉でも、お花であつてもだ。生け花の方が感じた事を表せる時もあるが、言葉の方が表せる時もある。どちらも用いてようやく多少は伝わる事も増えてきた気がする。人に任せる事が増えると、以前まで気になっていた細かいことも少しは気にならなくなった。気になっていたことは自信のなさの現れだったのだと今では思う。下生けが不十分であつてもデモンストレーションで生ける事ができるという、強い自信ができてきたからか、

他人が関わったとしても、自分の理想とかけ離れることはない。もちろん、よく話し、共に花に触れたことのある人しか周りにはいない前提はあるが、人に任せることで、自分1人ではいけきれない程のお花を皆さんにお見せする事ができた。私はデモンストレーションの際、手を動かしながら、お話をして生ける事が好きなのだ。準備の疲労からか、生ける事に一生懸命になり、言葉で花の魅力を伝えきれなかったことが本当に悔やまれる。只、手を動かし生ける喜びがそこにはあつた。それがその時の自分である。菜月の2作を含め10作のいけばなをご覧頂けた。

ジュネーヴで関わった人々への感謝の気持ちと共に次の時代にも伝えたいと思った。ご先祖様からの時間の縦の流れの中にある今の自分と、同じ時間を生きる世界の中の1人という横の繋がりの感覚を同時に持った初めての経験である。



花梨の生花 仙溪

華道京展出品作

花梨（薔薇科）
かりん てうせん

ベル鉄線（金鳳花科）
きんぼうげ

銅薄端
どうはくたん

カリンの花は薄紅色で、春に葉が広がり始めるのと同時に咲く。小さな花なので高い所に咲いていると気づかない。今回初めてカリンをいけたが、想像していたほど枝は硬くなく撓めることができた。ただし若葉と花の力を保つためには、あまり傷めない方が良さそうだ。前期に赤色、後期に青紫色のテッセンを絡ませて緑を補った。



メイちゃん。赤い椿が似合うね。

